和語陰騭録 再刻 全

早稲田大学図書館 1717

文政元寅再刻

日本 著

譯

和語陰隲錄 全

此編八大明表了凡人縣子天啓へ改郷ノ
お治みて光彩男女老と迎多名ますまし
ひる書也純作ゆへへ災害とまぬれ雲弐
得る事はるとう

明治卅一年四月三十日
藤澤清氏寄贈

和語陰隲錄序

藤澤清氏遺愛之記

古曰積金積書不如積陰德於
冥々中遺子孫永垂之計誠哉此
言也吾郷有一元名老人者讀州人
也博學識議不求聞達意甚

風采未見者不少亭幸奉
慈誨久矣一時被員與之暇為吾
靈口授陰騭錄而此篇也實了
凡先生所以憂戔陰德而為子
孫監是以拜聽者莫不聲節
嘆賞矣惟惜文辭至簡而讀
者憾焉舉衆切請為愚夫愚
婦假國字以解之公諸天下師
徐領而就菴采於是一篇之大旨
瞭然乎目下而後初足以披芳

宴矣嗚乎夫人之處世也遊乎
畀之彀中固不能遁順逆之境
而況有不測之變孰視夫立
命之說則天網恢恢疎而不漏
溫觴之勢如物使然豈不幽

且確乎哉吾師於自稱死名
老人也豈不亦積陰德之根據
乎同志金弟驥虞如者則乞
予題言予雖不肖而闚此盛
事亦何其幸歟是所以敢不

鐸安永丙申春三月南越

簡廬乾亶益謹叙

八些和俗を借りてもそむべきるれバ是
を畧もそるり
○此書の一體達意を專として辭ぢくもる者
故文体ふ至當の飾言ハふくそる實へさそれど
二字三字一句二句ふくそるの如きハ結びたる者故書そころ
ふとなー言外のそ味を推そろ恩をそくべ
たるも有り然ろとそて本文のみのるを添加
そるとハんべくざる者るり又但通俗を考を
もる本ふ字句及び事實ハ必ーを一くみ注釋せ
ざる者るり

○唐士ふ及第の業とうるめり伊呂波の制度通
とくる寫本も諸書を引て詳也。夥くハ繁れる
るり。俗耳をくそんで京ハそふ及バをの
とちづい此分そて学校そて学問系を設けて士農工
村里ごとに学校そて学問系を設けて。士農工
商のそべくびるく。志みる者を教へ学
べしめ。芸中そて学才るる者を。村の学校より
選び出して郡の学校へ挙郡より城下へ城下より
京へと陞ふ選び出して。甚ろ其人の生れつき
の向るくふ従て。而も友徒役人ふ仕そるるり。
故ふ志るろちハ其出世の為ふ学官をそるるそ。

和語陰騭録

陰騭の二字ハ書経ふ物悪ニ施て後とるり福とる陰騭とるふことゝして名つけたるる者ゟり

立命之学

立命の学ハ天命を知て死生有命富貴在天と定命ハ脳の内ニり一定不易の者も亦田貴賤貧富の者も長命ニるり貧賤の者も亦田貴ふるり子るをゝりのもの有ゝして。定不易の天命と為る方ゟり。故ニ此篇を立命之学と題ゝる也甚所以下ふ至て深くふゝくるる者ゟり

予幼少の時父ふ離る甚後成長して及第の業を学びしゝころに或時母の仰ふ曰く。甚方ゞ父死ゑして後。家等指南て世渡る業も知ぬ多るれハ。甚ゟ及第の業ハ行末行程も知れぬわざるるバ今ゟり警者ゝ為ゟり。人をも救ひ又渡世のゐふ

甚方ゞ文も為く。そを思ひてうそ〳〵ぞと宣つ。母人の命るれバ。否むべくやうなくんバそうり警つゝを学びしうり

さて或時予並雲ともとよもち連び居しうしに。一人髯長き老人出来まり。そ徳の人とこゝへ

これハ予も宮を改め慇懃よりてるたりき。時ふ此老人るに向ひて問。足下ハ及第出世そる人ふてれ

羊ハ決して、学校ふそて進む人るり。何ゑ及第の業を捨て醫者ふ成まる耶。吾ハ雲菌ふて孔先生と稱せ〳〵者ふて。邵康節の易道の秘極をわ

たるりのそり。此易道者外ふ授くべき者ふ。但

甚厳しく佛ふ仕ふる数ある故ふ遠ふとを踏とる

来まり。甚厳そん処ふて。妻ふさ処をとそて。母うども先ん私宅ふ帰りけり。我等そ時何も怪しそるれ

人の曰それハ奇妙そる事うるそ。何そも世ふ希ふ

底の人ふてハそもしけまハ浮ふ大切ふやまひて。甚教を受てそるべしとるり。此ふ困ふ一号を志つらひ態ふかくまひ居るり

さてそれうり。試ふ色ふのるを借古志むるれ後ふ

ふ一つも遠ふるる。當時の人ふも元来のやうれ

ハ云ハざるべからず。此ふところて予又母人へやとゐ此老人の
教ふまゐらせて醫業を止くべくえのごとく及等の学ふ文
をせうさして此老人ゟ一生の大概を占て曰く貴
殿某の年ゟ学ふ学ふ入り。某の年ゟ撰人ふ挙ら
れ。縦令村の学ふ授うけてハ。第十四番目那の学ふ授ふ
てハ第七十二番目。城下の学ふ授うけてハ第九番目ゟ
某の年ゟ某の年まて。公儀の御扶持を合ゐる
ゟの都ゟ、九十一人ふ撰ゟ。而して後ふ某の年ゟ
貢人とゐふ成ゟ。後某の年ゟ。選挙
せられ。江川とゐふ処の大尹と云官ゟ成ゟ。此
役目を務ゟ二年まゐて又京ふ登ゟ。十三歳

八月十四日ゟの時ゟ病死ゐゟ。貴
殿ハ一生子ども一人も
ゟの共悲く書とゐ
ゐゟゟゐり
此ゟ後村学郡学等ゟて撰ゐれ出ゐ毎ゟ
ゟ妻ゟハ云ふ甚ゟ極細のゟまゐも一つゟ
て老人の言ふ違ゟゟゐ其中一つゟ
き私持扶持を頂戴ゐゟ老人ゟ九十一石ゐ斗
ゟ而ゟ七十俵石ゐ及ぶ時屠公ゟ人ゟ
ひつゟふ見られゟ法の毎ゟの時節ゟお方ゟ
錄の人ゟふ推ゟゐて貢人ゟ出ゟんとせられゟ

此時予ゐんおく斗石のお遠く付て老人を疑ひなり給ふとゝろよ又楊子ゝ人有りこを不吟味るゝとゝろ人有出て屠ゐるを糺されて相やめふるり結旬八老人のおひ定めるより年月の処びくふるれ是此時狩く老人を疑ひそり其後とくくして狩を終る処よ又渕公と云人みそうこ予が作りる文章を見て大ふ驚き此を昔の名士ゝも劣らぬ器量也うやうの器量の人をむざくして御用ふるくぬそ不忠のゐりゐりとて楊その憤を解和りけ重く役百ふ十ゑて、法の通りの時名ふ貢人ゝとゐまり此時挟持方を計るふ怜ど老人の言バ云ゐもたゞ

ハゞを九十一石ゐ斗とるゐまり予此まふ困く進も退も狭きも遅きも盡くゝ天命一定の道理有りこと。るゐを悟り且つ老人の妙術ゝ嘆伏して弥一生乃覚悟を究めを頭ゐの望こゐを止めてんるゐまらくくと成しゐり

それより懇都ふへて留事一年也。其間ふ故有て南雍と云処へゐりしに役百へ著せさる前ふ当つて棲霞寺ト往いく予ら旧交雲谷禅師ゝ誘い従来離洞の情を述べそして世同出世の物語ゝ長ト二日三夜寝食を忘きてくり。雲谷ふ語らく気て我ゐ法門乃悟りをけざるへ妄ゝ障へらるゐまり

我と生誕をうけて三日三夜の間おーの妄念を起
こし風情をつくづく見解皆て然るやといふ。
予ゞ曰我き孔先生と云ふ仏家の教えを受て世の
中冥貴冥賤皆定りの教有るものを
知るよう然るに八何の預ひ知れる事ぞ皆念を起
さゞるをやと答ふ。其時雲谷大に笑ひ曰。我今
まで八貴賤を当世そいふ千万人にも越へたる
豪傑の人ゝと思ひしに今の一言を聞て八たゞ
もー通りの凡人ありてそ。暫くハ互に黙然たり。
良ありて予ゞ曰ざやうに呵ーもふ八定て理
ありぐーとうんぱ。雲谷の曰く大ゝ

道理ありるもの。幸ろう令数ゝ云者ゝ生の朝
ろう死の久べきもので。一定して生を出る者ろう。
而もこゝる極苦の人ゝ。極苦の人ゝ。極苦
の強きよりれゝ定めゝる令数の苦苦
ゝゝろゝゝ遠よもろう。個常底の凡人のゝ。令
救よ綿られて一生をゝる者ろう。貴殿二十年来彼
老人ゝ美用ゝゝられ。一毛の相違もなきゝ取ゝ
ゝらぬ凡人ゝろゝゝろ。予ゞ曰是ゝゝ奇らしゝ論
をゝる者ろゝ。而ゝ町ゝ人間一生生れ受ゝる。天令
一定の救も遁られべ遁れらゝ者ゝて候や。雲谷曰
ろうも遁ゝらゝゝるもみひ。我ゝ世間をろふ古今

もよの名ゐるき人ほぐけて天撲よ迷へり。ぢ厭我說を
容んとおもはれべ。我をそそくるを子らゐんして容かるべし。
聖人の作る書経よ曰作善天降之百祥作不
善天降之百殃と。此意ゐ人善を為せべ天より百の祥
を與へ悪を作せべ天より百の禍を降すとなり。天命
一定の者ゆゑべ福福も一定ゐべくして。此のごく
一生の内よ於て奪ひつ與へつ奪ひつ不定ゐやう。又我が佛
教の中よ求功名得功名求富貴得富貴求男
女得男女求長壽得長壽とゐり。然まべ初生乃
ほよ定りたる天命も甚後の事行よ因て中途よ変
の天命を変じて。或ハ福を與へ或ハ禍を與へること

ゐり。左傳よも陳の慶氏が殺さんて虞よ書経をゐ
て天命ハ常ゐき者とゐり。又下の経よ。儒氏
の聖人法門の如来倶よ亡妄語をゐるべくゐやとゐり
何とゐ思へるやとゐり。儒予が曰。儒仏の聖俗をゐ
る也。但し今ゐ一疑ひ有。子曰よの言ハよ求
則得之求在我者也とゐり。孔子の言ハよ求
我が身よ備りたる。仁義禮智の道徳を求るなり。
故よ求在我者ゐよ非ざるやの内よ倣らざる事乃
功名富貴などの寛ハざるをおもへとゐるなり。仏説よも出る
とも孟子などの寛ハざるをゐる也。雲谷曰儒仏の乃深

廣い狹い道に附く。その行向ハ各別うそぶく。迷明感通乃道理よりみて全く不同ハ無き者ゆゑ。後儒ハ佛法を疾むの強き故。聖道の仏理を仰ぐ事を破滅せんとす。此もまた偏く聖賢の誨服を曲解そるの多く。貴殿もまた今我一切の禍福ハんうおえ引て孟子の語を解き示さんとぞ。因らくそのまゝ分て云ふ恩人の止むを得ざる者。釘を打く人を咒咀そるも一心の感通ゟ依く。或ハ人の眼をおつぶし或ハ足をおるやまう。或ハ命をえ殺をなう。此をいくそれば眼をおつぶを全道もよ

足をおるやまうと横椎も。命を取殺すとも外ろう持ちまうゟ非ざ比旨ん中ろう取出しろう物ゟ非ざや。又若事れ分て云ふ郭巨が釜。孟宗が竹のゟ王祥が鯉魚妻詩ゟ雙鯉を得ろへ足皆孝行の心中ろう出ろう者ろう。舜禹ハ本ゟ王位をつくべきをゟ非を。匹夫の時ろう仁徳を積で。四百餘州の主ゟ成り玉ふ。此等もんの後ろう四百餘州を取出しゟ足ゟの例をいて孟子の文意を見ざ。在我者ゟいふ仁義道徳のごとん非ざ。功名富貴一切の福分も皆在我者ゟ非ざやゟ次下の文ゟ引ふ萬物皆備放我ゟ矣ゟいふ。若し我ゟ内ゟ向て求ゑざ。

よ向よて諭阿或ハ種々の謀計を運らしておるゝ
おやもうの為方ハ皆為ぬりくれぐるも天命の許
ゑりれバはまる事も成就せぬりのう。故ニ孟子乃
次下の文よ。求之有道得之有命是求無益於得
也求在外者也ハ功名富貴等ハ外よあるを
やうなれど。内くよ求まゞ得るよ巻あり。外
よ在る者とんな外よ向て務ゑ求るよ得るよ巻ゑ
とるり
さて又右りまこ示をるりぐくとんを傾けて
写うくべし。元聖人の書ハ一字千金ゑる者なり。
甚中も易経ハ天地鬼神をわひまふりて作り。
たまくゝ者あれバ。一言一句よくゝ尤。其賞罰利害の
甚ぐ恐るゝ已者ゑり。其易経ハ曰善不積不
足以成名惡不積不足以滅身小人以小善為
無益而不為也以小惡為無傷而不去故惡積
而不可掩罪大而不可解ハハ意ハ人くゝ平生よ
おゐづくの悪事ハさのくゝ
ゆるしのうれど。軽くゝ咎もあるもり。終ハ
類ゑぐ煮殺し。焼殺してハ
殺をとゝゝのるもり。其ハ
妻子眷属の間よ處して事ハ
きるハ多くゝ者ハ易の文

意をいふくこゝろまでべ。此等の小悪ても一ツ一ツ消へ失せべくして、ほく積り積りて大悪と成て、一命をも滅亡さするまでのつみとなる。又善もほくの善事へ。何の祈禱もなくばくやうにいふくでも。なくて行へべき積りて大いなる福徳をうるぞこと也。又同ほく易に曰積善の家に有餘慶積不善の家に有餘殃といふくこゝろ。此等も五人の童子も能く知りたる語也。次上の文意と全く同じき也。然んを什て考へこれバ。豈器ろかれたる非をやとうくう雲谷子又問ふくへ。彼老人向きよき厚の一生涯を。

占ひ極められるうう〳〵我くへ實さされとも今一ツ〳〵右老人の占是まで一點のわざくく狂ひ未占ひ定そうる故うやうくとおくび物語うせうぞ雲谷逐一實異つく曰さてくく驚き入る易者とて而ふ未老人のごとし〳〵如く登第も壽命も五十三第ふ事極て予が胸に入る如く悉ひ又問く天命を変だるる故へ未ぐ會得したはざうや吾や子甚寸ふ実さうる哉久しくして對て曰情ふ〳〵の故へ甚深至極となどれとも指ふ示ふて未まく意得ぐさくいかゞ何者ぞて高發ふ登る

人をころす大底皆福相あり拙者も福相を備へ
しと云ふを以て福分と頑勤も成ぐ〳〵
そこに生れ賢こくして世の中の世話を恐びぐ〳〵又
人の冰をこゝろくに勉むるを我ら主智をめぐ
人をうごい或を我ら心ろをこゝろを食料も好く恣よ
取行ひにも妄み愛相づらをつふれて此等の類
皆商猾の相ろとあるこゝろの器こて行こて言
宮ふ登るを得べくんや且又高無の理をもつて
推察こゝろて拙者み拉くをおべ〳〵ざる細數
くのり一つふれて地の穢なるれふ土こゝるが右ふ多
く草木を生ぜて清そるふこふ魚なき者ゆ拙

此之老う彼こゝ嬶て其うるを甘ど此等天地萬
おぐゝざる乃至四人を亂ふ依く立つ者
るう等ろる附ハ孔もろ仍て或ハ男ム應ぎぬ
力ぐ或ら言ハ多きを者ハ生まを損ぢるう拾
者ハ法なの如く子生多言者ぬべ生まもかか
ゝんおき者ぬバなぐ生まゝんぐ已をぎ生まゝ
ぐに生まハ牡ゝかりぐゝざる乃至五ムおゝ
大酒して腎精をうムかゝ一六ゝム每夜ぬぢを仆
てえ宇持神と保書ゝろる事とせぢ此の如きお
皆子かりぐゝざる乃至かゝなどるう狩ぞ紙の

過天ハ不ゝく救ゝムぺゝ是をいく言夜の理
もぺぬをおんつもりまへ曾てゝく覚ぬ
るうゝく言ム
雲谷笑と含んゝく曰なるやうの萬相
つてハ高菓ゝも答ゝく曰なるやうの萬相
ゝるのゝやゝぢ世間百金の外代千金の外代或
ハ又十代續きゐ代二代續くゝ等それくの生れ
顧の宝救かゝぺ天ゝうハ曾て分毫の指引も無
き者るう。余ゝ上ハ只下の如く天令れおち任せて
うゝゝゐ悟ゝの如きのるり。而ゝよ差よ一ゝの要
論かう。專ゝんよゝ如くれそ世るの人のゝく教化

もろもろの比丘を勧めて。己もまたかの非を知らざらしめて。行るゝも但己れのみ是として。足下を是とせざるの故なり。足下此の物語を一々人の為に説き聞かせ。あまねく霊ひ隠れたるの事をも足下に毛頭も隠さゞれ。我が非をうち明けて此を全く足下の猫相を生ぜしめて。前表也。太田に曰く天作孽猶可逭自作孽不可逃と。蓋し天命の定まりて受ざる所ハ。務方みづから追ふて逃ざる。此自然の理なり。作りたる孽ハ必追ふて離れざるの福も。務方更にケまじなひ裏やれで生来おのれの福を受るなり。自ら務方まち冥加よりきたりて猫を求る猫徳ハ。天神地祇の冥加に依て忽

も奪ふ能ハず。彼老人が足下を出世と遂ぐ。

子もろ〳〵といふ。天神地祇の冥加に依て忽ち霊下の務方より受け得る孽ひ。務方更にケまじなひ裏やれで生来おのれの福を受るなり。自ら務方まち冥加よりきたりて猫を求る猫徳ハ

即時に改心して今志一決して今日より始めて今日まで悪しき事を為さず善き事を為すが如く生れてより死するまで悪しき事を為さず善き事を為すが如く一日も一時も一刻も一分も一秒も悪しき事を為さず善き事を為すが如く清浄なる者也是れ天命定数八皆な各別道徳再生の身を以て各別道徳再生の身を以て各別道徳再生の身へ人間なる者也道徳の身へ人間なる者也道徳再生の身を以て為れの半分の半分の半分まで為れの半分の半分の半分まで為れの半分の半分の半分まで

ろ〳〵必ずしも悉くを盡さゞれども假へ名こそ一つなりとて。悉く二つの名と二つの相とを具足せざるべし。二千條に滿ちぬ内より。半頌を決して成就をすべきぞや。雲谷の手に於ら。まして同じく古くの聖者のゝ人を教ふるよりの方なり。上根の者ハ直よりの教方なり。上根の者ハ先ず身の行ひを用ひて。中根已下の人ハ多く下根なれバ身の行を專とそゝるなり。而れども識なき人なをゞゝの行ひの話をする。一と通りや手とべし。孟子曰。夭壽不貳脩身以俟之所以立命。此則愚僧が所謂立命の行の出不也。夫とハ短命の長命のまゝ也。壽ハ長命のまゝ也をもとるまゝ。好こゝ短命を死ぬ人同の第一よんづらひんて。短命を悪しんて。長命を不願とそゝて。長命を好む悪道よ。但せて。微塵も心づらひをせゞ。皆氣よ混して心を虛空の如くに持つなり。それ一念不動と云て一切の念を起さゞる。念無相の時のんハ虛空と今全く同じやうなる者なり。虛空ハ本より生るゝの名なれバ。長命短命の論もなし。況や長命を好こ短命を悪しべきや

かゞくこゝをきこゝろ。此の如く土臺のんぢを。
虛空の如く無念無想にして置て而後
み。德を修ふ。即ち自求多福のまゝ也
と雖へくゝ云ふ。一切の草木は種子より生
ふくゝろ。若し種子を。大地へ植へゞして虛空ゝ
をうべ。陰陽妙ゝといへども。此種よを生ぜしむる事
へゐゝなる。心を空よとゝいふ。指門ゝ空ゝ
ゝろ。色ゝの天命を拋捨てそれゝせめ仕方ゝ。
種子を虛空よりいゝ。草木と生ぜしめが如く
ゝゝして修身とゝ教ゝの破損を修理そゝことを
て。所の惡の破損を去て功德の材木をゐて修

理とる意ゝ。僕之とゝ右の如く。德を修ふれ。
已とをゝゞゞ。又天ゝ富貴と與へゐゝ。
う。ゞゞく何ぃ望むことを。其外一切の望とゝを捨よ
の意ゝて居る叮ゝ。自然と一切の不須法是とれ
ゝゝ。是を僕之と云ゝ。元そゝの預ひある中ゝ。
書命ゝ童き者ゝゝ。右ゝ孟子ゝゝ壽命の
ゝを安て。一切の預望ゝ右ゝ立命の說を。
者ゝ。右ゝ立命の說ハ聖道の幸源と知ゝゝ。
又道教ゝ御符を書くゝ秘傳ゝ。ゞゞ秘傳ゝとゝ
ゞゞて書たる符ハ鬼神ゝ知ゝゝとて。大切ゝをゝ

るのあう。芸書きそうへ筆を執て存を書く時。
諸の雑念をお捨く。一塵ゐの会を紀さぞそのの
時一路を書き始る也。此ものを混沌冥基と名る。
式の一路そうへと筆を書きそめて芸そうよ会
慮起らざれば芸存能く霊験ありとそう。上の五字
の。天壽不敢とこと文意と。し道家の一会不動乃
そと味をふくんの行ひを行ひ。令を得せ
らるべしそて身の行ひそうおしに別のるよおしに飢る
者に含を施しそ。紀者に衣を與なとそる底の
るなうるのうのるを行よ者の恵んよおりるべきや
うにそけれども心の行ひそ。此ぶとバ未。そんの

垢多しそ今ろにそ廃とそてもまそんの行の場所
ふそそのあそろぞ此れよ周く芸代りよるるの
を教ゆべし夫我が衆の業提陀羅尼とこ至を
倦もる者も但現在一旦の衆業を滅るのこそ
らぞ過去無量劫来の造業を消滅そるそ芸
文よ曰く曩謨誐多南三藐三沒汰倶胝南怛
侈也他。唵者禮主禮準提娑轉賀そのき聚この
呪そ至生間断そく教そるそぞ喝て後よ
口くせのやうに然まで唱へられよ然そ紀ハ彼の
虚空無相の代そて発日こ不作の若るそ
よ勢い付きて神明を感動そるそ實よ走る

馬よむちをかくるごとく如くるべきこととやうれき。
○訳者曰く又那謨薩達摩芬陀梨佉素怛覧。
とつる秘文あり。又宝おくくて而も茶きこの咒
文よ称ふくる事萬くるべき者之。
予始へ學海と号そて雲谷禅師の玄令の説を
写て包ち一ん七を誓へ一ぬをバ茶の学海ハ己ふ
犯して今日の我ぶ身へ再生の身なれ学をも
予允と改ち此意ハ此までおそほ一れ允人よ
てかう一るもとアぶ又幸のれ人の旧里よなやら
うれとの識の為也ぶそ予世の中にうけさろうふく。
ありがたふ皆せ一ぶ一度雲谷の教を得てう。

行とそくそう学の門よ狗う居
てもうかくもくべ鬼神の崇を受くきう心中
よ恐るゆへ公ふぶ世の欲深を捨ふくよんもち大悦みそう。
隠くふ世の欲深を捨ふくよんもち大悦みそう。
又ハ謗られても。苦よるごとやうれ給ふ。
鬼角して芸五年三年ぶ一く京よれく。選りん名
一生そくく時老くのよ三番目とつ一ぶ。
打越く第一よ選び出でく。実道ぢうれ給ふ故
信仰かうて。禅師の玄令の説を性ふぶよごとくして
学くくう。然もどもくう。猶我ぶ身を者よ沿ふ

願る多し。或る事て隙ノ
勇むしんおく。或ら人を報へたるろくく精よ入るべ。
或ハ身ノ人務て善事をするを。ロ1非言をまっ。或
ハ酔ーる叮ーく大事と思ふた醉後ろ放逸の事
おろう。此れよ困て善事二つあれど。更ろ日
もおり。或ら善ろ十一おろ日。おろう
ー故己已歳ろ立願ーて已卯の年もで十般ろ
のろふごくよの善行やうくよ納ひてまろっ。此年も
多るよおろうーゆく翌年庚辰の年。性空上人恵
空よくなごくと請待ーて。東堂の禅堂よおくく三
千善の仏書ーてぶ此祖先の徳1報ー奉うき

此叮又子をおる願文を拵げて。二千善をおろうんと
拵ら願をろろり。ろる處よ翌年辛巳の年ぴやを方
が生れろう
弓一善を行ふごくん。甚二ら悦而1記ら。甚方が母を
又子れを助けく。或ら多くん施ー或ハ鳥類魚虫の。
生ろろる物を。買て救ーろ
ておりうー故。善をおりへ但朱筆にく。○平と分ろう。
此の仏文一日の内ろ十般のみも及ろる多し。是よ困
て終ま。の年八月よりや三千の
善行を満足せりぴ叮ろ仏法上人を私宅へ招待ー
て。ここの善の仏書を勧めろう。甚年九月十三日又

[illegible]人に石一生ささんと祈く。善事一万條を
修り終んと。死々一百をを指ぎたる其年ら
享和丙戌の年月丙戌の年に。寶坻縣の令となん言ふ
仰せ分けられしら。予は仰り向ふ經の本一冊。治心
篇と名けて徧め至けりぬ。朝を七つ叶よ起き裝
束して表向の座敷に出て。それを小性ども右の
治心篇を打来て。卓の上に置ふ。身んともよお
しの名かしの思しそくを叶治心篇ふ
紀し。夜を寒の趙折より敬やく叶篇を卓に載せ
て庭よく出く名ると梵天に向て上帝へ申よるふ。
是を毎日の格式と定ふ今るれよ或ふ叶を方ら母

予ふ語ふやうふ家し小宅よ移ん並んでおりし叶ぞ
清平よおもい助ふく。若事をふ多しなん。三よのふき
若事も。救年と経てし成就せり。歯叶を御役
ぐ〳〵も事もげく。又ふ堂部屋も間をく相隣りぬ
よ設本のふれが下も部ふよをよなりて。若若
るもなし。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。叶ふ。
勉強さんとそもげくと悔こけり。手も幸ふ叶ぞ
と毎の毒よ思いしいは。悔くれしふよくも予ら
うふぐりしぐぐを救ふ。彼の愛をとふ。人予ぐ
おへよ来てえてう。予若人よ向て右の字の毒を
を設しれば叶人の同ぬ糧一節を減ぜんまれ一

叮ゝ金かゝんとうつ平吉をよび出して考ふるよう。余ぢ
分一町よ分きニ分四厘七毛ぞうぐ。此ぎの告を
つゞく拠百姓へ觸を流して今年より一節を減して。
一分ニ厘ニ毛と定めやう。然ともども多よこんとうれ
のこのうをバうらぬの大吉よ於ても事ようや
落ちぬる哉と思ひしに此ぎの墓の幼余禅
師来りぬう。予甚よ喜んで此るを宮ゝ〳〵禅
師の曰く善心真切うゝバ一行も萬善よ勝るのあ
る。寶坻縣百里一里四方の内の百姓ゝ一節の稗を
減し與ふ功徳うれバ豈第吉よ勝らぐんや況や衣
中の告とうれバ天ようう告げ来るう。何の疑ひやんや。

とうられよう。予甚をう
ぜんよ吾救多濟して
おゝく衆僧一万人を供
ようそして亡の考人ハ予を五十三歳八月十四日丑の時よ
死をとうう。予敢く
ニ業の時行の傾もう
う。聖人の曰く。天
不ニ干常とうう。是ぢ
不ニ幻ふ依て定うるもの
祥為ニ不善天降之百殃ひ又禍福無不ニ自己求
とうう。是ぢ皆己ぢ幻ひよ依く禍とう福と

るゝことてる眼證うう皆聖賢の言うう何の疑よ
ひきるのなゝんや況や予自飽ぬまでも味いと嘗く
思ひ給ることや今よりおく〳〵一藝の疑ひうや彼の天命
八十定の者うう。命若し改むべうんべ豈天命というべ
うんやなゝくくる。天命の後よ固て改やう定るものを
知うん。聖人の教よ従て身をおゐて。ひべうる者のこゝ
へうるまう。そ方未ぐ若輩者なれバなゞけ和語と
信じて活ふ吾根を約よべし。さて又甚方が天うう受
得うこ命教よ依く。若くうる富み居るものゝ〳〵バ常よ
落ぶをたる者のんりらとせよ。若又行事も甚方が
思ふまゝ行ゝく叶ふ。行くるよ放くる為をとらいゝう

しう妨害なとら来ゝぐうゝざるかとゝ。ろふおやぶこゝろよ
べし若又子代行ふ足ゝ安く。ろゝ極く貧乏人のん
りらふうゝぐし。若又人よ愛し敬ゝゝ身とうゝべ。我
を行の徳もなくして此敬せうるゝ勿驚うれる
うなとゝ思ゝな。若又威勢ある権門と成らバ里ト謙
退の思ひをうべし。若又学よ弁進して。
高世ふ於くハ人も知うるゝほと成る。行ゝトよれ
思ひ設ぐし。そをくハ祖の徳を輝うるものを
思ひぐくハ父ぶ徳を補るものを思ひ。上うハ国の恩を報
ぜんるを思ひ下ハ家門の繁昌と願ひ外うハ人の急
務を救んるを思ひ内うハ己まぶ利益うれを思ふん

るを思い日々にて己まざる非を知りて改めよ一日己まざれば一日己を益す過ちを改めと騭も同じ一日過を改めざれば一日吾れを益ざるをそろそろなり。天下にをぐれる学者多しといえども。自負も徳義を積んでも慶く教るをせざる行の悖る不敬なるをいう言の天命よろしからざるを知らざる者ぞ。是を因循躭閣と云。雲谷禅師授くるの五命の説は。至精至遠至真至正のをもって勉て行よろしく日々をるをなれ

謙虚利中 須と虚とハ習ふんを要して胸中にわもかをくおぞ行るの要きこそう。利中とハ中にろぼくる処のくんをいうぞ。凡その人形ハ流してるの者ハ免れ外よりの者多けを虫ぐんぎんぐんぐんぐるの者ハ免れて飛も自然とうんぎんよう着みうなよんのうんぎんを第一とをるをもう是を虚といふ。道家の虚の字と形とをいうぐんぎんぐんぐんぐるの者ハ行もやしそらくく着もう飛らぶろうれども。門人の強遜うる者ハ自然とよろうみれえのみうぐ一役のくんかりて内ん心ハ高慢にて飛とロとをんてぐ神不相応よりうる者かりうる是を卑下慢とそうう。悪しくて慢ハ七慢かりう。慢とる高慢と慢る慢と場上慢と卑慢と私慢とかちょう慢ハ特ハ厭悪しくきこそ。神明仏陀ハ特ハ厭悪しくきこそ。神明仏陀ハ特ハ厭悪しくきこそ。神明仏陀

ぞろ〳〵利根發明十分の人と思ひ人〳〵十分の人と思ひ
おとしめて知ひ侮りて自滿をし貴人は殘き者
ふ驕り富る人は貧者と驕るなど皆盈の字の意と
謙は即ち謙虛のこゝろ天の乃も地の乃も滿ては虧
けくなるの日月星辰の運動水の東と流れ湖のこ
ちひ其他大山を備とるなり。江河は五とるなんど。
皆日ごとのこゝろ。人乃のこゝろ情を思んで謙虛
を好こゝろもて人情のこゝろ及ぼすこゝろ
こゝろ。但し鬼神の害盈而福謙といふのこゝろ乃
ゆへ〳〵ありてこゝろ。鬼神とは非乃のこゝろを学
宮のよふにても。世乃の才智藝能の業とも上へを

仰げば限りなき者こゝろ。然れども尤おく況小物をて
そへ〳〵みる者は恐ぢ人をあざむくこゝろ。よく
修生こゝろ才智藝能のこゝろ。行者行ひとゞくよ
ふ人こゝろ。よく人と仰げば限りなきこゝろをもつざれ
ば人〳〵我ら不調法者こゝろ。自然と謙退してこゝろの
人こゝろ。故に才智藝能徳行をもてる人に對をれば劣
なる人及て有徳の人と仰げば限りなき。然まべ不徳凶愚
の身こゝろて有徳の人を侮る心豈大いなる無礼なる
るにあらじや。中にも富る人の家居衣服をと

ざる。遊興飲食を華靡を盡して貧るも人よ騙
るとこそせゝりて自ら楽ことゝする人くの常情な
きどる。独下の方りて大いよ亦こるもすくそれそ
世の人の富貴を願ふ大の強を極て榮綫の人
を見下てこそ下ざるんぐ爲るもの人皆けんりきをべ亦
より覬覦ありけるもの人多くもゝぬるもの又書経ニ
曰。滿招損謙受益といへり滿んるもの人ゝ
鬼神とくよ亦こゝらゝ故ぐるもの人ゝ
ゝるのこ生まるもの。然もぐる本と滿んるもの
故我ぐ亦こゝ故ゝ我をぐの者るゝよ亦こ

ふ有ても不如意ゝるこゝ
鬼神を怨ゝ怒ゝるもふるゆく故ふ損を招くもの。
又謙ゝる者ハ天地鬼神とくふ哀憐せゝる故亦
事ふ有ても。益ゝるもの人出来るもの。ふも我ぐ益
き故ふ益来ることゝ思ひぐ。是皆亦神先祖の御ゝげ
ゝるゝんと譲る故ふ益を受るもの足ゝと滿招損謙
受益といひゝるもの。又易の地山謙の卦ハ亡爻ゝる
ふ皆吉ゝるもの一卦皆謙の卦ゝる故ゝもの。予もべく郷
学國学ゝ学ふ在ゝく。各貴ゝ尊のふの出世ゝる者をゝる
ふ必衆人の中に。各別目だゝて謙虚ゝる者ゝもの。且
く一二をゝ引く現證を示さん。ゝる辛未の年の計偕

小私云ふ計偕しくぱ國の役人三年に一度で却く皆な用ようるものぜ
次もよ及第工誠こらく話生を引ぱれてとるる。計ハ皆な用のそさく
偕へ引つきとる事
そ計偕しやく。嘉善と云処ようぷ予と同時よ上京セ
諸生十人皆ゞ其中よ
○丁敬宇ハ年も最もおろうしぐ。生れ賀玄く謙虚
ようぷ予費錦坡1向く話るぺし丁敬宇ハ今年必ど百
生れん費錦坡ど同く我ぞく古へよう謙虚の者ハ稀く矣の稲そやぷ予ど
同く我ぞく古へよう謙虚の者ハ稀く矣の稲そやぷ予ど
とくぷ。門賢佳く十人の中に敬宇ど如く悩く勉く
くて。真實ーてその私ーふ内ばる者なりやぷ又
敬宇ハ皆く恭敬順承とてうやもしぱくーみて人
をそふらぷ。小人謙畏とて物事大事くふーて。

人よみるうくぶうぷ。ふるよに乳くぶうーぷとぶくもる者
なりやぷ又受侮不答とそぷくよおるやふうぶうーも先
らんでも。其ゐ報ぐくーもるるやぷ又謗不辞と
てぷくそーらふくを実て必ず我らが如き者誰もろそ
らぶぶーんやぷそぶぶのるやふと思へらえてぷーも云
い用きなどへせぶぶるやぷ。如ぱるやふくふの者とぷ。比
家称の助けるよ故ぱかる年決ーてぱ度ハ立身と
存るせとついきぷ。ーて撰び出されふ。
○馮開士へ幼年の時ハ。佳ふぬくぶうの者とて皆
ーぶぷ予丁丑年京よとそ
居もふ。予不思後よ思いーぶぷ。後く交遊ようをぷ。

して。幼年の時のくるしみ。大いふお遠くして。そのごと
謙虛者うて。かうき。
○李露岩へ予う友うてん正しく。諒かうことのかう。
予猶試んとおもひ。人の善うるを毎いるをこころく
設けて。もてうふまうけうふ。ばノ人面色微
塵も變ぜざる。極厚そのひとうけうう。眞實ふ以ひとう
予う日福の來うも。禍の來うも。必ず表かうて。ほんあう
ふく者そう。今我が足下と罵辱せーん。實ん試こうと
うう。然うふ足下の謙虛。平生ふ十倍せう。天の助うれ
必然そう。足下必を今年石をうれんとうひけるが。
呆して予うひしく如くこもき。

○趙光遠ハ。山東冠縣の人うて。童年のはじめふ
拜う。師ひもとれうふくそ父嘉善ことの。奉
行ところうてりくは。趙光遠も父ふ隨て嘉善へ行き
うう。そ知ふ錢明吾とくうる先生かう。都光遠往く
知うくふ父を。旦つ自作の文を持ふして見せられ
ハ。錢明吾。元きうそこの會稽も每く。筆をうてそも
文を教こふ直して反古のやうにもうう。而をこ見な
ううとうう。光遠の底の者そ。大いふ立腹をべ。
光者をおーも怒うの氣ふ。又くすぐ
喜んで。甚すく直しの通うふ改めう。每うの謙
虛者故りや。そ翌年之郷うて

○壬辰の年予參內せしに。夏圭夏建初より出仕し。ふ。甚〻〻〻甚だ畢下澁退して。真實願ひ願たり。予友人と語く曰く。允そ矣ようの人と和を與へんとするは。ハ猶を與へざるに先づ始めより其の人のんだてを變ぜざるもの者え。〻〻〻〻倍の者ハ勿論として實に始やうやまさらに紀ふ人ふの者ハ俄ふ此と乱ふもまう。初父兄をも親ちうだ仲をも敬やまざる者も。つとめく丁寧信んよ然るまでの類うまう。今夏建初が風采とえふ極く天猫をはぐべきやうにうとうとこれ果して選ひ出されたり。

○江陰の張畏岩ハ名高き学者にて。文章の名人なり。甲午の年南京の卿試の時。文章を作りて出し。極めて第二等第二人とハ下るまじと思ひて。其の頃或る寺ふ寓宿して居をりしが。其日よ出て榜を見るに。第二等第三人にそをきゐ。張畏岩の張の字もなし。畏岩大ふ立腹して。其時の判者を睨目の者くて。散〻ふ罵せり。時よ一人の道人を座ふ在て笑ひ止ハせずして。友て喉をうるをして。汝何故ぞ。かく怒るぞと。畏岩これ〻〻道人の曰く。我を足下のやうに。文章の名人の者して。人第及第をうるをうるをうるを

ん膜をえて汝へ未ざ一面の知る人ゝ非ざ
予が文をうくる事へ我あるべ〳〵ゞ何故ゝ妾ゝ恩
父うやうとらくるや。道人曰く夫を文へ人のんを繪き出
を者うれべ仏者のゝ志ゝ氣溫和うて。七情ろるに辛う
うる時へ其文自ら粉てなる者うや。今足下の胸中甚ゝ辛う
と思にやらゝく辭氣を考うふ。足下の胸中甚ゝ辛う
うゝぞ。其不平不公のんを繪き出したる文うれで。
未ざ足下の文をうんざ其をて已ゝを下ゝ文なるを知
をうとうひうれべ畏ながもゝとぶの者うれべ一言
とうてぐうろうと我をおけ道人大盧の者ゝ非ゞと
思い。係ゝ言と改くゝ足ゝ今の云禮とは鬼ゝて願くく

へ慈悲の教ちを垂ゆくと。謹ぐゃうれで。道人の曰孫生
くゝとくゝ考りゆくゝとそを記をゃべ。それそ人の
智のよへ一定の令數あり。足下此度擯ゝのるき令
うゝべたるゝ文へ拙ゝとゝ
ぐゝき令うゝべ足下の文まうをで巧なるゝき文
まうても。擯ゝ入ゝぐゝぐゝべ。擯ゝ入ゝるゝ令
ふあり。文まの若悪へ二の次きうり。足下若ゝ出世
ゝ志ありゝべんのんゝそ出みをゝ悪ゝ曰已ゝ主文
の余りうれゝ出ちる文まのよゝ下ゝゝ固らぎと
えうぐりゝや安んゝて速くゝべきうゝ先生行をう改
めゝゝひゆゃ。道人曰足下実ゝや造令者々天

立命者、我也。と云意へ命へ我より建立
てる者ゆゑ。建立して成就
して。其通りに定めやうある事を。天命と名
づけたる者ゆゑ。實ハ我と云ものなれども
也云々譬へハ小家を大家ゟ改め造らん如し。それを
造る者ハ天ゆゑ。大いなる材木を細ぐる者ハ我ゆゑ。我
木を細ぐる者ハ。ゆゑ事の小家にて一生を過
足る生来一定の天命ゆゑ若大家ゟ改やんとする
者ならバ。我木の用をとゝのへ
家も随ひ天より造り改めやう者ゆゑ。
云々

集ゆゑ。足下の不幸のゆゑを改めて。謙虚の材木を
積集めて。足下までの破れ家を打壊。新たなる朱門
高客の大宅小造り改やうと。衍りやうで。天命造化
の大工豈改め造りやうんや。天命一定としてある。
茅をとうくして茅を改め豆をとうくして豆を改る如
くして。ある者ゆゑ。ゆゑも天命の経をとうくして
我ゟ困て天命と云者ハ。我ゟ一人の者ゟ悪ゟ佐く賞
度ゟ天より豆をとう四まゝハ豆ゟ改め。茅をとう四まゝハ
茅ゟ改めて。卯可しゝ。天命靡
常と聖人のつゝしみ給ふべし。天命靡
常と極ゆゑ。ゆゑ〳〵諸虚へ沿ゆゑて務むべし。指ゆゑ

儒ふみを以物を施して陰騭を行ふの徒ならば。如何道人曰く若事陰徳を施さんと欲せば。但人の使用に依るべし。自然と施を施すことを得ん。限ある財物を施すとも。謙虚の一事の如きは。限なく。且くん乃受用の中にて。無量の人に物を施すに等しかるべし。謙虚ひやはらぎて。世界の人と和合するの法門なり。廣く人の為に方便を図るも。謙虚の一事に如かず。謙虚の姿を以て。好き衣と蓄ひ。美味を含ひ。家居を奇麗にし。頭髪衣帯を飾華やかにする物を懐中し。腰に佩刀し。扇子を持ち。手に珠数を持ちて。教ひつゝ舞ひつゝ。其外一切の法を具ふるもて。ずも人に員まれとそびこゝを争ふべからず。悟悔を添きる細かなく。もし人の村里を云ふ及ぐ。一天地一空間のく天鬼神のうちを譴責とうべからず。悟悔のうちを譴責とうべくば右底の二切のうちに分人ようへ内湯くと却歩して謙虚と参めたの業俗を至徳と参めたも。謙虚と参めたもふるの道人の山林へ隠を佛者の衣一鉢の貧道を行て乞食とるも。謙虚の至徳と修行そうろうなり。因て謙虚の二字をもつ者ハ。一日美味を含せるれバ一日食とぐき分の者。一日

甚だ美味を世界の人夫婦神へ濳り奨むること。
又好衣服を着ること衣ず紅ねく一日も好衣を著せざれば。
一日も好衣を世界の人夫婦神へ濳り奨むるに於ては。
るべき大宅をも建つる者なれば一日でも乃至一月一年十年百
年ても。そのことをせざるべからざる所を。
きるをもつて。甚だ大宅を世界の人夫婦神
へ濳り奨むるに於ては。其外一切我身の為の奢
をもきるを止めて。せざるべからざる所の人夫婦神へ
譲り奨め奉るに成る者なり。因て謙虚をもつて
千万の費なくして。施行天地の間に溝るまり

故に孔子も至徳と称せられたり。足下行ぞうの大道と称すべきや。又行ぞうの已まざるの情慨を改めずして。妄りに利者を図るは。甚だ大いに感悟しのんの垢を洗い捨てて。若事徳行日々に修せざる時の年にして。或る者不思議の業をなすべきや。甚だ難きことなり。足下試に我が家をもつて試験と為して彼の及ばざる時の人別次第并の帳面一冊有り。畏岩能く披きこれを見て名のなきに行きつ。又ふしぎふしぎ思議小児の傍の人に向ひけるこそ。其人の曰く天上より拾ひ撿めて人間に落下の若き

盡く記錄とるゝやう。甚中に及ぶ者よ一度づゝ考校あらゝ。同上及ぶ者をぐき者よりて。德を積ゝく答ふ紀者ハ皆け帳面よのゝゝやうそ中処く名のうゝゝゝ及第ゝる況ゝ不ゝのゝをを行て德と損ゝる葉を削りゝたるゝゝ未の方の名のゝゝゝ三行を指て云汝二年業を持ゝのゝ外ゝ愼めゝ困て山一行の内ゝ汝ゝ姓名ゝのゝゝゝべし。猶ゝ務めゝるべしとゝゝ。果して玄中の帳面の次等の如くゝゝ山年ゝ選舉三百五人ゝめふ幾せゝれゝゝ右校のゝをゝゝ推ゝをゝべゝゝく頭よ三人のよゝ決して神吟歷ゝゝゝ。

ハ皆我ゞ系行のゝ名ゝ依て彼神吟遂一同ゝゝ視そゝゝして賞罰詩を處置ゝのゝとゝゝ。盡心屈已へゝゝゝる者ハ甚ゝゝゝゝ愛ゝべき者ゝゝ。山一般ゝくゝのゝゝ仏神の御意よ合ゝんと志して。ゝゝゝゝゝゝ真實ゝゝ謙虛をもて福を受るの基を建ゝべきこと也古語ふゝ有志于功名者。必得功名有志二于富貴者。必得富貴とゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ未代ゝ揚んと志をゝゝる者ハ後ふ必功名を遂る者之。又富貴よ志ゝとゝる者ハ後ふ必富貴のゝゝとゝゝるゝ是皆行ゝ処の志の急ゝ也ゝく強ゝふ依ゝ蠟の

今ここに天下に通ずるところの信義も。志ここに者の問斷
ここにそなけるまこと事を遂ることをつくることもの。志
ありて樹の根のかりそめ如くうち捨ておくこと書言とれ
ば終に大木となるが如く故に忠孝と称する者ハ盤
石の志をもて今ここに謙虚をもて事に物ごとに徳
を積て天地鬼神の意に合ひ天命を造ることを。
今の及第を求る者ハ只その真の志なるに非ずして但一時の慾向に依ること
出ず諛諂の句の黙をうるが如しこのうちのこと
まて忠安をなすもの孟子の曰く。王ハ好樂甚
齊其庶幾乎ばんハ音樂ここ者ハ今時の樂ここ

ちがひなくの樂ちがもそもそ音をつくり虚空ようう
洋ひびく。集もとどく。獣も起動し。鬼神を感
格し。天地を感動せしむるほどの仁術なり者。
古へ天下を治るに禮と共に樂ハ二つの道にして
太平にかりそめ事なり。然るに齊の宣王樂をぬむ
根ざしより若し根ざしを善ひ育て真の古樂
を好むやうに成ときハ。天地鬼神の助けに依く
齊の國を四百餘州の宗とするやうにとうかうんとそう。
予此孟子の言ハ以て效ふくも。但謙虚の一事ハ
育て謙虚と好むの甚くしきハ終に天下の宰相閣

向の住よ望るまもくそうらんとて存る也。○私よ云。自
分の一人を謙虚の一行よ固ひまこべ。天地鬼神及ひ
人間の神魂を感動とそる趣を知らしめんとて此の
孟子を引く。其動の場の聖語の処へ結帰也
そのそう。

積善 此篇へ善事と行ふ意にて。その報を得る
易ふ云く積善之家必有餘慶ぴんへ上の段よ
もる如く。善を積めべ必ど餘多の慶ひ来る。第上
の注文そう。昔魯国の顔甫とう人娘三人持て
を甚内一人を孔子の御父叔梁紇の妻よせんとて
三人の娘よ告る。其うハ叔梁紇の先祖を代く賢人多

くして積善の家也。叔梁紇年老ひとりとくた。
此人の妻とそうへ。必貴きこをとらて家を栄ふ
べし。従ふ往くべきやと云ふれべ。三人目の徴
在と云娘此ふ承を合點して叔梁紇の妻とそう。
やがて孔子の母とそれり。孔子の御先祖を尋く
こへ。唐土の宋とう国の大名とそ知らる。第上国
をゆづりて甚身ら臣下となれり。甚子孫を範の
家そう事とそよ挨ぬそ。結句ハ外くの臣下の家よ
重ハ大いよろこぶるものぞ。其家の家風となるべく
代く謙虚として徳を積ふ。叔梁紇へその子孫
る故孔子のやうみる大聖人も生ふるべきやと

ふーて。微在の父頼甫の物語りもせらるる也
家語といふ書ものえたり是等美ふ
次下の帝舜の二事ハ積善の家ふ餘慶ありし
中ふハ古今第一の冠頭なるべー。故ふ今篇首ふ引
出もそ。孔子帝舜の大孝を說て曰く。貴為二天子一。
富有二四海之内一。宗廟饗之。子孫保之。とのふ。
帝舜孝行の大善と積るのふ故天子と四海の
天子とふー。崩御の後も御子孫繁昌して代く
子孫の榮とうけのふぞとふー。此等皆積善の家
ふ餘慶ありし現證そう。今ふ近来他家の往事
とりく。積善の餘慶ありしものと知るべー

○建寧の楊栄と云人。先祖ふ貧家ふて代く
僕ーありと家業とやう。或時大ふ久しく濱もそく。
濱れをびくもく漲出て多くの民家とおー流し。
或ハ倉木ふ至るまで流くふくもあり。死く流くふ人ハ数も知ずぢ
くう。其外のふく小舟ふ棹さー。而ふ人ふ目もかけ
ず。資財道具ふ障子疏木等の類殆ーくひろひ
ふもそ。爰ふ楊栄が曾祖父と祖父との二
人の親ふハ板の疏おーも目をとつぞ。但身
をなげうつてぞうを救ひ助けう。他のふくも
指ざーもく。馬鹿者ぞうとて笑ひそそることふ然ども

つつしみおそれ仕合ようく父のまもりする時節ハ餘りど身よはくなりてから父のまもりに暮せしとの。或ハ異人來て揚栄が父よ語るやうハ汝が祖先大いなる陰徳あつて孫ねと尊貴みゝんとつう。揚栄先祖及んで。果して二十歳のはじめや及第して天下の極官たるこ公の位み升もつ父をやしなひ及ぼ孝行せるの祖父も。皆祖父も皆贈り官して先祖を耀かしたり。其子孫一門皆歴くして而も多く皆賢者あり。今の自免墳とくる塚ハ彼もろ先祖の墓なり。諸人のありなるの其方ゝぞも知る事なり。

〇揚自微とつる者ハ。鄞縣とつ処の宰の嚴肅ゝ下ゝ吏よりて。公事方ゝ付て偏頗ゝ行ハ。なり。或時歲粛一人の罪人を捉ち。血ゝぐれく罵ゝ満き。怒りの氣猶盛んなりければ。尚微其罵ゝをくさなぐわびれば。嚴肅曰く。汝者安ゝ法度を犯し。其上ゝ我をゝ忤つ。我非道ゝ立後ともれ非ざゝ答ゝ。自微頭を地ゝ付けて曰く。傳へる古ゝ王道のせまゝ。最寄くゝ師也ゝと云てく聖道を教へゝ故ゝ民人皆正直ゝして法度を犯ゝ者ハなし。其教ゝ方ゝ至れ故ゝ百姓正直の道ゝ立つべし。汝の法度を犯ゝとハよゝ立つ人の罪ありそゝ聖人の言ハゝも罪人を吟味して。假令罪ゝ落ちるとも不仮ゝ思ゝ

べしとて柄こそよて喜ふことを
戒めつゝ而ることに況や怒りをやいはんや
らそこ様ことも覚へでと言ふを盡してかけまじ厳
粛も通理よ伏して物うの氣和ぎたることよ
自徴たやうのんだての者ゑしべ賄なごよ決して
受ぞ。家久く来勇なれた牢者の内して朝夕
の食物の乏き者をぴぐ食物をこそう
て憐へごくめう。或る自彰ま牢者の者救人
なう。甚ご飢よ及ご扶をなう。自徴が家わ節飯
米乏よして。罪人よ食をと與んとそれぴ家内の食扣
ふーつぐせんと其妻ふ相談しそれぴ妻の曰く罪人

へ宿の近き者たるやぺを方の者うや。自徴ぴ曰
扶とよ処よ来まう然ごをた処なう。路をぐら
飢つれく飯皆薬の如くうとこそれど。
妻も哀とりこよして罪人よ食ぴ物ぴ出ー
て豬ふたきて罪人よ含めこう。平生の芸悪行
皆ふのやうの悉きこう。然ふ自徴二人のをと持
てう。却て守陳へ北京の吏部侍郎と成り。次男守
趾も南京の吏部侍郎と成りぺ二人の孫を生
ぢて。一人も刑部侍郎と成りー人も四川の廉憲とふ
まう。而も四人倶よ名ぢ名ぢ各ぢ扶
て高官大禄をはぢぺ名ぢ名ぢ各ぢ扶持せられく各ぢ扶
て高官大禄をはぢぺ名ぢ名ぢ楚之亭得うぐも

甚ゟ孫なり。

〇昔正統年中に猫建の鄧茂七と云者亂を起し沙縣と云處迄のぺく數百里の間ゟ蔓りて叛ゟ隨ふ者甚ゟ夥しく縣ゟ驚ゝ恐れ諸ゟ依ゟ朝庭ゟ鄧縣の張楷と云人ゟ仰せ付られ謀をめぐらし茂七ゟ縛めとらなんとぞ後ゟ餘黨多くかゝりもとべ布政司察の謝都事とつゝ人ゟ大軍をめぐらし捜殺さべと仰せ付られとつゝ人のごとく者ゟそうされべ行とべ人を損ぜざる取り治めとぺ云ぺい霸ゟ帳面十冊をとゝめ又白き布の小旗を數ゟ餘黨の中の然るべき者を招とゝをとゝ諭云く汝ら必ずも擄ゝ盜賊ゟもとべとゝ今とゝ非ゟ改めとゝ良民とうとべ我一令にとゝをとゝぺく叛ひ助くべとゝ汝ら迷者有とべ汝一とゝ帳面ゟ及びとゝ非ゟ改むるとゝ改めとゝる者共の門戸ゟ白き小旗ゟ立とゝ表とゝとべとゝ含とゝれべ其者共ゟ教とゝ同とゝとべとゝぺ云ぺい。幹時の同ゟ餘黨の者ゟ依とゝねの鄧茂七ゟ已ゟとゝくとゝ皆大方の軍兵とゝもに戒て同

者へ曲事たるべし。況人を殺たる者へ殺て許とうの
うへ。ましてや白きぬ旗のえたる家うへ老若男女を擯
出さんをおうべうべしと觸たう。是に依て謝都
事に助られて命を全ふせし者一萬人に及べうと
そうぞうの陰徳故ぞや謝都事ら子謝遷へ及第
の第一よそうらう。遂に宰相の官に升そう。其孫
謝否へ及第して探花郎とそ。第二甲の科に升そう
○又同じ福建の林氏の先祖に慈悲深き老
母あり。常に家に園子を設ふ。ある方よりそうへ園子を
て。貧人を食せよと與へたう。或は異人ありて老母
のん徳の慈悲ふうを名聞の施行ふと試と思ひて毎朝
来て煮ふたつ七つ往づゝ我ら食へうぶ山の如くそう
る三年だうのうふ。然を九十老母ふうも
氣色うくんうく與へたう。彼の異人老母ふ語て曰く
我ら此三年の内ふ空ふと含くうぶ此ふ困くみる事を大
いふ報ずくべし。汝若し没前の後ふ高く葬べし。汝が墓所ふ
猛虎ゐる者。麻の如一升の救をどうぶ長とくう。果して其
高座甚かうふ九人出生して大官ふ升そう。後
代く富貴安榮うふ今ふ及ぶ者うとうくふ及ぶ者
とうくふ。

○馮琢菴ゲ父諸生たる時ハ冬日早朝ふ起て其呂の学校へ行ふ一人雪の中にすべりて伊卧たる者有ふ不便の事ふ思ひ己れが着て居たる衣服を脱て著せ宿舎をやとひて帰ふ遣ひ與らしめたり其夜妻ふ神人来て告て曰く汝一人の命を救ふ是れ女と義理有る中ふ非ざる乎ふ琢菴ふ誠ふ生涯ふ渉ふて婦道を行ふ者ハ稀ふ有ふ事ふ候ふ我甚褒美ふて轉琦と名け

まべ我等も亡く入り代りて素とうみべしとうそう。
應尚書はくぐ冥々不便のるふ思ひ翌朝夜の内
ふ此彼を頼こ自分持ち前の田を賣りて白金四百
をおくうさて其まなるべし先ず金子を指こび
を封じこおて追付けねべ彼が姑対とひう
作なよく書きそて。そ永へをしなう。彼が姑対とひう
きそてこうふ其ふ跡の直筆に非ざるを疑へらも。
大切の金子を預かりぬ我ふふ相違ハかりもうと
信じて。遂ふ嫁入ざこと止めふう。果して狂なく
そ夫化生ろうねりて。ぞの如く夫婦となれうそう。
而も金と状とを送りしふ應尚書ぞうふ歩でる

るうそべ永内親子ともふ綾ふ行者の為とうそうを
知らばうう。應尚書又或夜冥神の語るとまけべ冥
の云く為学生めが一大事を妨なうとうべ又一冥
く仕ぞ其学生ふ然ふ一冥答へて云
くされべそそうふ思へども。天帝ううけ学生と陰徳の
尚書と命ぜられう。我等行ってまざるとは
んやとうう。應尚書ぞとつなりてそて八我ぞ度一人の
婦人を助けてる陰徳ふ依くやぞて尚書の寿ふ幷べ
き果報を與ふようそうこうて八因果報應の道理ふ
ぞべくく畏き者うそとて愈ゝ事と行ひ或ハ必
年うふ果報と施行し。或ハ親類の内急病のとき

そのかれが萬方ふる時て救ひ助け或ハ人〳〵ふう之理非道を言ひ分け爲うけらるゝ星皆我が徳の爲もさ放ちてゝおくも怒らびる受順へり其仁厚寛裕なる皆大類ふう其後終ふ鬼神の語みたがへど尚書と云ふ宿ふ升しふう其子孫及等ふる者今仁累くたう

○常熟の徐鳳竹が父母ふ事ふる大変くふう一年大いふ飢饉なりふれど我下仂ふうふうの仂徳ちび給ふくふうとおらびて許ふくふれ外くの酋百姓ふるどふも色く勧諭て許せふ甚ふ又我が産を弄く米穀を出して粥を畫く施行ふ給ふ多し然る処或夜鬼神の声ふて其門ふうて唱へて曰く千不誰萬不誰徐家秀才倒做了舉人一郎ふうと此意ハ徐鳳竹父の名ふ依ふく尚多ふ公儀へ石出さるふうう。此ふ於ふ公儀ふもふれべ倒做ふうふうふ千ふ一ふもお遠ふうとふふ不誰不誰とふなるふうて。不誰ふ依て其父善徳と積て卑風竹郷選ふ中れう。是ふ依て其父善徳と積て忘らで。或ハ擔ふ行処へ橋ふうけ。或ハ狭路へ廣く険路へ平ふう。或ハ諸人ふ出會てんをふうて。若事を修ふべき旬を教導ふう。其後又鬼神の声ふて門ふ唱へくふく千不

誰萬不誰徐家ノ擧人直做到都堂とぞへう。風
行渠して大いに出世して浙西と浙東との巡
撫使とて二官ともなるとう。即都堂のごとう。
○嘉興の屠僖公と云人初め公事方の役人たり
しが竊に子人に従て獄へ往き。諸の罪人共と
理非の物語りどもし。其實情をよく聞知て
囚られたる者若干人かを。僖公さべきよく公事
どものぶんよりわれこそ無實の冤を受たる者
なれ。然も自分の功みせびらかして甚
頭の刑部尚書へ達せうと。さて考問のはてなんで。僖
公の書付の趣を聞くに吟味せられし故罪かる方の

者どもに各勝ふさうえて誰陳だる事紙へさ理非明
らかにわかれば。其の罪を免して許さるる者十餘人
ありて僖公又此趣よ奏して尚書ともて云く。今都
堂まで公事ぶ沸くかくして尚書獨りと智惠者とえへせ
僖公ぶ沸くかくして尚書獨りと智惠者とえへせ
ども及べう。足下信く洛中ぶて尚書を智惠者うとて。
いう僖公又此趣よ奏して尚書ともて云く。今都
の衙膝えの治獄ふさとう。罪多くして苦む者多し。
廣き四海の内ふ定めて撲道者もかう。酷役人
も有て。無罪の者を若しむるの多かるべし拷者ぶ見
見をふくやさべ。又年次一度づて於ふうん。ふしく私ふて
役人を撰ひく。減刑の官ふ任と。西方都會の役所く

へつらひ。甚役人のさばき方の理非を吟味なきバ。
廣大の御慈悲ゆきとゞくべし。尚書もる事極たると同
んして。其旨を天子へ奏聞をして意よき儀ゆゑ
て。刑傷公も大庭の西きさんなれバ減刑宮の人数
そらつをたゝり。傷公或夜の夢ゆ一人来て告ていふ。
汝が天命なる一人なるに。然るに今度汝ら減刑の奏
聞深く天心に合つて是に因て天帝より汝ら二人の
貴きさまを與へ給ふべしとつげ。其後應瓚應坤
應埈とて三子生れ。皆高官となれり。
○池陽の馮志守なる七人そうだ人目の子馮信
といへる。幸湖と云処の袁氏の婿となれり。我等も袁氏

して同姓の故なりや。此信と我等ゆゑ。甚親き
明友なりき。然るに此信ゆゑ博学なる才の人にて度く
選挙せられ九江の宿因にや。ふく官ゆつく
るゝ事ざりき。幸生道家とて仏家とを仰せ人へ。
或時仰湖とて処ゆ移りて不日一寺の内ゆもうけて。
寺門ゆ観音の像ゆすゑ。堂もなく雨露にさらさ
せて置まゆ極の風情なりければ。信之約し畢て勿。
堂建立の志なり。刹中著と拂ふく金十両を出し。
仏持の像ゆ與へ。金をつくし。
像と安置してたちまちに仏像の口光像
よりも堂ゆ充つるほど。十両の金ゆて功を終へんとす。況

来るーとうひろれが信之ゑ箋の内と掛く布にえ
と衣類七色をとりて與へなり。信之の僕の曰。七色の
内廉の袴へ彩したる物うりたく。ちく阿不自生うもり老
法ーのえとうへ。信之が曰く。菩薩さえ雨露ゑ濕ぬるなどべ。
我へ赤裸にても苦しからじとこひて皆く倩ふ與へられ
べく衣杉の傍涙を流して曰く。今を捨衣服を施さえへ
さのえ難きさるもも非ざる。貴公已今の御一言ハそうも
有難き御志にて作ろも甚だ志を扶て普請
仕らんとうひきが行れく結構ふ出来せう。生業の後
又信之我等が父を招同道して甚寺に系ぐして。
一宿せられそ我そ寺の伽藍神。信之が爰ふくて謝

して曰く。汝が衣ゑの功徳ゑ報みてぞ。孫く官禄ゑ栄ゑ
べーとうろ。果して信之が子孫。馮汴。孫。馮擾馮芳。皆ろ友
ふるもうとうをたるもえ非ざとゑ尚ゆのうもう。
〇嘉善の支立が父ろ。是又公事方の役人たろうが。
衆人の内ゑ幸無して斬罪ゑ宛ゆるん。ゑふく
幸をみ思い。仏をそーして助ろくふろう給ろう衆
人ろ。此様をえのーぬるもべ。ゑど辱きろ
ゑ思い居ろうれそ妻子。牢屋へ舎を送うまうれ
ぺ。衆人妻ゑ向くまゑ公が赤志の辱きうのを給りてぞふ
涙を流しそて妻ゑ語ろ。ゑ我ろ方ゑ一生涯乃
別いあうぞやうハ此月我ろ宅へ支公を招きて汤着

狂んぞろふお洞へ其方身を殺して夫公小事ぺ
公若し其方ホ意カりくべ我ぐ今或ら々助る事も有
だらーとろう。ぞ妻も夫の生死の大事なれべ泣く
夫令くぐて夫の敵の如くま公を請待してけや
くりてるしけま共ま公えろう丈ぬうのくだくのく
なれべ申く其妻のんふ従ぬぞぺ飲食のみてねり
ろうこれ九力をろくーてそれおく絶ふ斬衆をのがを
もめたろう。其者窄ろう歩そそもく夫婦ともれま公
ぐ家ろう。頭を地ろけて回くぐ公れ真ふ我ぐ一命の
親ろう。ぱ大恩ぐをれろ報ぐもーんとそ。血の涙を
流ーて一禮を述ぐて早縁ろぐーちんぐ今中年

も過ぬ。犬ぐ以ろ二人もなーぱ我ー若輩者なぐろ
娘二人りてろ。孔くべ公のろーはろいまろべーぱ公己ホ
我ぐ一命を助ぬる陰徳あるべ我ぐ骨肉をろうち
たる娘をまろべ必ず子を産のまぐーぱ足利陰
陽感通の理数かとなまろ作とろいられべま公も
無ー一子を孔ろおろうーまぐぱ感通の理をんま
ろホやふいやぐて本妻の禮をれ迎ろまろ後菜して
夫をーろまを生ぐ二十余ろうて甲第ホ登り。翰林
孔目の官ふまろ。夫立ぐる夫高ぐ子ま採
代ぐ皆わられく。大学博士の官となれろぱぐろ
夫綵ぐる大倫も甲第ホ登ろう。足等皆汝ぐもろ乃

あるべき事なり。
凡そ此十條の如く同しからざる者は皆
善事と積と善を行者の心より出て陰徳
と積徳との別ちを云ふ。凡て善事を為ざる我
のみ善人と云ふべからず。耳の鳴る我心
故と陰徳を如耳鳴とも云ふ。耳の鳴る我心
まことにこれ。他人に一向関るべからざる如く
人の知ると知らざるとに関らず。但善事とさ
へ云へば勇み進んで務て怠ることなく根ふんを用
ると積徳と云ふべきなり。陰徳とも云ふ積徳
ともせよ。其の事に縁ふて名実ともに
(四十九)

れ實義と務行人はら。諸の災難を滅して諸の幸
福の来るの基ふ早速ふるのみなり。且世間ふ
勤めて多くのよふを積ふんでふ人ふ善を為るの易しふ易
が如くにてせざるが如く我と我
順風ふ帆かけるが如しふ又貧銭ふる者ふ善を為るの
難しふ難しふして為ざるふ善ふ銀ふ富ふる
難ふして為ふ善ふ如くふ聞ふこそよふ教んけ
あらふ善を為ふ善人顔をせざる。此と云ふの善
人とてぞふしふて又事に縁ふ従て善を為
る多端ふ入ふ因ふ来ふく其大要を云ふ十ヶ條
(五十)

なり。第一ハ與人為善ニ愛敬存心ニ成人之美ヲ
四勸人為善ヲ五救人危急ヲ六與建大利ヲ七捨財
作福ヲ八護持正法ヲ九敬重尊長ヲ十愛惜物命ヲ
第一與人為善とハ言ハそれそれの云ハ
ゞ。くくの中へお雜くゞ。のとれく誘導するなり。音震
舜とくゝ聖人ゞ通ふ居住をゞ可ゞ與ゝを捕て高
貴ゝとゝる者ゞゝをゝんゞゝ。おゝき者ハ老人ゝをお
し。延。陵者ハ弱ゝをゝのりて。與の多くなゝる処ゝ
てゝゝくれゞ弱者ゝと老人ゝとゝゝゝ與ゝを捕ること
能へゞゝるき。震舜不倦のゝにゝてゝめし。自ゝ者ゝ
ふうちまゞゝて與ゝとゝゝゝゝゝ老人或ハ弱者ゝ隨

分與の仏ゝなる処へ教へゝゝらびきて。與ゝを多くゝれ
らしめ。自身ゝ與のかゝまゝれゞゝおーぼゝゝゝゝゝゝ。
又其ゝ大勢幡掲ゝる者の中ゞ。ゞゝにゞゝゝゝゝ長
まんまゝゝゝて者ゝゝゝゝゝゝ

ひきのべてとなう。聖人の辨舌にて教のつゞ辞よ不足らかりまゝにそれを忍痛を知の者へ能く行ふる能なぎる者放。自御身をお過ぐ教へ遂ぎんの如。足外無人為若也。凡人と共かゝと慮して若るふ志と者ら。若為へまことを勧めて共にくれる為とべゝ。己年せだゞてぐくれかち勧めて若事と為せだてうとなうとて妄人を侮べゝ。若事と為せだてうとなうとて妄人を侮べゝ。若事と為せだてうとなうとて妄人を侮べゝ。

或ハ疾病貧賤ノ苦ミ或ハ文章政務ノ労ノ如キ君子ハ勿論ノ事小人ニモ亦或ハ名誉ノ為或ハ嫌疑ノ為ニ勢ヒ已ムヲ得ザル者モ有ル故ニ君子ト小人トノ異ナル所ハ此ニ於テ少シモ心ノ白黒ノ如ク分ルヽ者ニ非ズ孟子曰君子所以異於人者以其存心也トアリ此君子ト小人トノ分ル所ハ存心ノ一ツニ在ルノミ。君子ノ心ハ一切ノ人ヲ愛敬シ一切ノ人ヲ大切ニ思ヒ一切ノ人ヲ大切ニ愛セザルヲ得ズ。仁ヲ天ノ心ト云ヒ禮ヲ天ノ心ト云ヒ一切ノ人ヲ愛敬スルヲ仁ト云ヒ一切ノ人ヲ大切ニ思ヒ一切ノ人ヲ愛セザルヲ得ズ。仁ヲ天ノ心ト云ヒ禮ヲ天地ノ法則ト云ヒ一切ノ人ヲ大切ニ愛敬スルヲ仁ト云ヒ一切ノ人ヲ愛敬スルヲ禮ト云フモ此仁ト禮トハ一ツ物ニシテ其ノ名ヲ異ニスルノミ。仁ハ天ノ心ニシテ禮ハ天地ノ法則ナリ。天神地祇ト合體スルヲ禮ト云フ。賢人ト云フモ此仁ト禮トヲ存ジ一切ノ人ヲ愛敬スルヲ賢人ト云フ。聖人ハ即チ仁ト禮トヲ全ク具ヘ一切ノ人ヲ愛敬スルヲ聖人ト云フ。聖人賢人ノ地位ニ在ル時ハ即チ聖人賢人ノ御手傳ヒヲスル人也。廣ク論ズレバ萬物皆我ト同胞ナリ。而モ仁ノ方便ノ説モ至人ノ明徳ヲ以テ萬物ヲ照ス事ナレバ。吾輩ノ如キ凡人物ヲ骨肉兄弟ノ如ク思ヒ親疎貴賤ノ差ヒヲ偏頗ノ思ヒ

を施こさんことを。第三成ン人之美ことを。言て美き者よ為ことなり。まゝ八豚されべ石亀も同然ふう。人の内徳よ吾志有ることを。助け導ひきを八。辛くの忠志有る者とこんべ。人とそゝて資みちびくべし。若おゝ人ふう大吾事を為ことを。進め入ることを或ハ化よう紀ふべ。空きみ後てゝいるべくなり。又平生悪しなるのかるゝ人分ゝ八我も一先身を撤く。を中ろへ入ゝ。百方よ方便して過を改るまりて感悟

ことべし。大庭人ゝくの人ハ信ゝて我ゞ好ことちゞいなる人ゝ。博厭者也。而ゝ小世間ゝ吾人ゝ多物ふ。多物なれべ。吾人ゝ多ゝ紛み妨らゝ故ふ。人ゞ十人ゞ百人ゞ多ゝくハ皆。志のみて一生空く朽。果る者ゝ。偶百人ゝも勝ゝて一器量有る者有ゝ。ゝの人ゝ。細謹ふかまゝハれ者故身まの異風ゝを。ゝいたゝて成ぎ吾事も妨らゝ者ゝ。但学ふ仁人長者とゝ者有ゝ。希なゝ仁人ゝ。ゝ悪心ん涼き人ゝ。長者ゝ大ゞもゝくゝ大ゞもゝくゝ。悪悪心ん悪ふくゝ大ゝ多ゝくゝ。大人ゝ。ふくゝ。

又ハ我ニ敵シ又ハ我ニ敵シテ而シテ又限業ニテ死シ或ハ導者ナクシテ又ハ導者アリテモ或ハ一人ノ讒ニテモ或ハ數人ノ讒ニ

よふそうの人を侮るを恥ず我よそふらぬ技術をむさぼりぬくの深計を企ぐべくそれをそうんとし公事公儀をして人と疎遠をうけ。後ろ指を差さるゝ如く恐もこゝろ神を挑撥し親類朋友乃好きくまでを恐にし。狂走者多しやうして惑たるくをでふふを添ふにてぞ。若通へ勧人をてぞ。ふよ弱たるくを助わけなるが如く。恐もこゝろくと。栄覚してるが如くふ發得さんでまそう。韓退之曰十時勧人以口百世勧人以書とくぷ意ハ書物を仮つくくを勧るハ百年よ年の後までもなのくの利益をうけをいくくを勧るハ一時のみとぷれたとくハぷ病のくくハ書物をとうんせてぷ彼ぐ煩わめるくんをよとべきこゝろ。書物を仮くく教るハ實よ有世の利益うぷ。然ゐ元已よ病をうけるくハぷ過人をとうんとそんぐとるハ過人をとうんて縄をるふくて直よ脈とをまよまを與へくぷ。療治うんべかりくべくくぷくくハぷくの生れつきなる者こゝろをべ其拘好ふ後てぷ。うりくて悪をえて若ふ仮くぷ淺ゃを教るふくぷ然りとて同なの病若を救ふるまを捨てとふれ

非ざるなり。されど我らんの切なるまことにぞくいさめて先生の御ふるまひよりてうとなるくしみなり。我身より子弟を我が才覚として徳義の足らざるを知りて過ちなからんがうへにも立派なる人物とならんがうへにも教へらるゝ人なり。

第二救人危急といふ人の難義を救ふん或ひ恭くは改せりの一対に猶て義或ひ不義とをたゞさず言とりたる不潤法にして小成処なる難義或ひ非理ふ撲通をとりらけらるゝ人畳ふさびまるゝ時の難義或ひ一時の

簡ちがいにて御法度なるを犯しゝる時の難義等ふ足等の類常くかゝるものにて而も人の為目をうんて仁障ぬ神ふ祟ゝりてずくゞ十人寄付ぬ者ゝれば苦痛逼迫ゝる者ゝやうの時節ふ我が身のこふ引受て彼此大がいふ謀定めて言を以慰諭それ式のるのやどのものかんとうにぐ。そ人のんの若を宛うまひべ。甚よくて後く立まを運一。身ふおへまて救助べし。崔子曰恵不」在」大赴人之急可也。此意ハ人ふ労情を施さんとまさて者ハ恕一もるものと大ふうハ限らど人の急難ゝりるをうて身ふ引受て救ふへかゝるべ彼ふ貴ぶ

人者の言とこゝべ〳〵まで学問の人の中にさのみ若
人くる非をゝて或ら生れ付きたる無学やきこうて人
の急難を救ふ或ら人ふ思ひ為たる義を救ふ或ら人ふ思ひ為たる義
の者大まの気ばくうそんどこゝそ役りなた人
とかくゝしい或ら刑罰ともれわるべき者とぷまるゆふる
をとゞめて安んせてをなの外ふ大いふる若根を
為し而ら其身ふこのこの若ゝぬ者かりか
世うの人後ふ或ら不ふこの金りふけをし或ら富る
人ふそらん或ら発明る好ことを生ぷ命長久
そそるふかゝる妄ふ永ふ治ゝうと遂る者多しけりのて

若者ともわうで仕合の好人ら古来ふうの人の怪疑
るなれ共かくれてる若根のかうし故とこゝふの人の
行ふびる故そべし但人ふ身の若ふをを
救ふぷの知ぬ人ら若ふうふ
屋ふぷふ特更素能ありて
人ふ施ふ為をもうそんど思ふ救
更ることをべし。
第十一興建大利とふ大きくらく四或ら邪ふさく云
へ村里ふおく其の人の力相応ふ人の務ふふ成る
人和のうをとうるうぷ或ら吐血まこれうふ渠を掘。
或ら堤を築て洪ふの儀を防ぐとうし或ら路橋を修理

もて往来のくるしみ夜りしかを免。又ハ宿を備或ハ異
しき食ものを路ゆくものの杭ととゝのへ
どもとゝのうるをえ。或ハ此れもの准じて知べし。
一人のカよく及ハねるものハ多人をかりて
べしと。もろのるをもとゝくとゝ
とゝくとゝんどつひく。逃者なり。甚ハおゝもの
まだ又我身の若労を顧ざと。但人のそらくとゝ
天道の御よ仏ととゝて天道の術をふ人と思ひて。
まく疑ひ怠ることなかれ。
第七捨財作福とハ仏法の萬行の中にも布施の

行を第一とゝ而も此布施の二字つゞめていへハ但捨の
一字ゆ帰とる也。因て修因ゆも施財と云ハ
いひたる也。仏ゆて説法と捨財と
二ゆ施をとるハ法ハ命ゆ勝ると。財ハ命ゆ
劣ると。是ハ命ゆ重ハ法ゆ軽ゆ。
故ゆ船ゆ意ハ法ハ著ゆとるなり。眼耳鼻舌身意。
の六つを六根といひ。色聲香味觸法の六つを六塵
とゝゝゆ。人間一切の働ハ此六根六塵ゆ極るなり。禅観
のこの布施の行とゝハ此六塵の欲ゆとゝ捨ゝゆ我
我身の六根をも空なるものとして。我ゆ執とせざ
て捨つるなり。故ゆ経ゆ六度を立ゝ此ゝて六ハ仏法の一ゆ要方
行の功徳をも。盡捨て為ざるなり。此を以ゆ男の外

のはなり。今論ずるところ内有漏善の中の施行のごときなり。甚多くの人同じく衣食を給ひ命を續ぐ者ありといへども食ハ財これ命の大切なる者なれバ財ハ人界の中の慳貪の水を免れ出でゝ捨の字の意の閑へ投捨たる意の陰の業をなる意ありて故ふ初ハ勉めふくれ出でゝ悪しき藥して報應の味を知ると紀ハ修行の人自然と進む者なり。○私曰ク仏法の中の小乗の方ハ貪着を捨ると云ふ仏法の乗の法門なり。實大乗の法門を捨るゆゑに。

又ありともおぼえず。衣ハ寒を捨ぐ衣ハ寒を也。但向の德要の捨文を唱へ捨の字の意ハ閑へ物を捨べきなり。一紙半銭の小者も大者となる意ハ陰の業をなして施をべきなり。○自實大乗の中の小乗の方ハ貪着を捨ると云ふ仏法の乗の法門なり。實大乗の法門を捨るゆゑに。

ゑ。此其於しなる物を再び用ふまで意
密故ぞ。此意にて八切徳ぬしてよよい
あるべ。ゑ。尊の於しのんまに八合ぐて
同く陰の業をとそる意にて施をと捨と
云ふ。然其よふ随喜のんを起く於てハ。
弘聖意ふ合ぞ。決よ陰徳の捨と云
ハ陰徳刈ち捨ぞ。無ふ陰徳の捨ハ丈の
如くんふむしまと思くども。元んのあ
さまーさふハ思ひぐてまハ人ふ恙さ也
まぢ又礼を言ハ也までとて陰してとれ
るべ陰してとるもの大徳とるまつけハ古

語ふ。天聞如雷天見如電とて神明の方ぬく
深くみるもの。ゑ放ぞ。中庸ふ莫見乎隠と云
へるも同しんべ陽徒と陰徒との不同ハ有れ
ども。捨の字のんを用る於きハ同しぞ。
貪女の一灯ハ陰にして仏書ぞるれ非を
第八護持正法と八。儒佛の教を束て正法と
云ひるる者也。此正法を徳を積を天下を治
め。君を勧悪を懲ー二世の悪報と成能と
るるとしハ人くにて眼目の如くなる者
りれハ。必学敬を盡とべし。其ふ非社仏
閣ぞる細くの木像経典の類ふまでも

若破壞ふ及ぐ。寔く修理を加へ盛光倍增を行ふべし。経文ふ一ワの警わり。藁をれん と思ふく猶を残べし。藁をれんでを求まそでを好ふそでとふ。仏教ふ後世の藁をれた。現世の藁をふるのこと仏教を修行をれふ現世の藁をふるでと云辞のん也。是をれ世間の中ふ仏法傍のニツを云寶として二つのたゝ とふそう。此二つを大切ふとふこと別して護持正法とふふう。第九敬重尊長とふ國王君家ふてハ

父兄を始とう。位ふ人道徳のうきん人学識の偉きふる人を八皆くわが師ふ敬ふをふ。中ふも家ふ有て父母ふ事る者ハ卒生ふ兄我ん底ふ依く親の大恩を有難思ひて身とん事るふも言を以勉れふもの。おふてもふ母のんよさゝぬやうふふぐべし。又年老てハまびしくなりのみれバ ふく例を離もねやうにとべし。假ふも窮乏ふなりそでと思ふべう。ゞ窮屋ふる者なりて ぶれバ癖ふなりて又癖ふ於て

窮屈よ安きのうさ父母の喜ゆふ嬉
く樂ふる者こ考く此務を八勞
成性として自然と柔和吾次のこへ物こ於也
柔和吾次のこ八一切の吾神有ふ立働く
守護とそ〳〵の身小事君如天
とつくの君の見つまつ事ゆふ処にても。天
通八見徹なり。上八百姓を恤
為政刑賞ふ私なきこ八吾上ふ余の盛徳ゆえ
〳〵。古ふた者の余の繁昌をふる者の

同余をこえても初べ
等十愛惜物命ふ八教生を戒ふ教生を
戒ふ八別悪ふる悪八仁なり此仁こ云者
八別人のんなり。鬼神のんなり父く天乃
んふり。凡人こ始ふて畜類虫けらふる
まで此天のんなる仁を余とせげる者八な
物の實の内の柔ふる肉を梅仁こ名付ふも梅
の木の生くふる根幹の余となる者故仁こ名
付なる者なり。桃仁杏仁ふても皆余又人の
身の内ふるふもび生氣の多仁処の病
の名を不仁とそも其なる処八余ふ

とて之を名けたるなるべし。此れ仁乃至物乃命なるを知るべきこと、是をとりて孟子を悦隠の心と云ふ。悦隠とて人に非ざるもの、なるべきを人に非ざるとも云ふ。悦隠とて人に乃至仁乃至なるべきを仁人の心なるものなるべし。故よりの命を殺すを仁人に非だと云ふ。是をとりて殺すを仁人の心なるべきを殺すを仁人の心なるべきを殺すを仁人の心なるべきを

又云。同一ニ人んだとも。殺うれて苦む事ハ。其肉喉より下らざるまでハ。其肉喉より下らざるまでハ。其肉喉より下らざるまで

周孔ハ佛ヲ非ル故ヲハザルナリ。殺生戒モ儒者ノ戒ヲハ非ザル故ナリ。曾ク云ク若人儒者ナラバ都ルトモ善ク殺生ノ業合モ本ヨリ無シ。カヽルモノトハ古典ノ中ニ未ダアラズ。論孟禮記等ノ中ニ天子無故不殺牛諸候無故不殺羊太夫無故不殺犬豕トハ云ヘリ。或ハ狗ヲハ捕ヘ網ヲハ捕ヘ或ハ溷川ノ魚ヲ

捕ルカモ憚ラセ或ハ鳥ヲ射ルモ寢ネタルヲ射ベカラズ。或ハ子ヲ妊メル時ハ捕ベカラズ。或ハ捕ベクモ內ニハ殺サヾル時ハ捕ベカラズ。或ハ殺ヲモ宥メ云ヘルヲ見ルニ全ク殺生ヲ善シトスルニハアラズ。又聖人ノ出世ニハ麒麟鳳凰出ルヲ非ズトスベキヤ。又聖人ノ仁徳仁ニ歸仁ニ名ルヲ故ニ蟲ケラ迄モ生ルヽヲ善シトスベキヤ。然ルニ風ハ生物ヲ含ミ麒麟ハ生物ヲ含ヌ。但竹ノ實ヲ含ミ草ヲ踏ヌヤウニ生ヲ

此生に殺生せざる仁鳥も殺生せざるを
以て人も殺生を好まざるの理なり
と答ふるが如く云々
其ごとく仁人も亦殺生を好まざるの理なり
と答ふるが如く云々
ら〻ど但し物を殺し天人を殺す刹
我を殺也故に聖道を修行する者は
きるものなれども天下の人くよ聖道を学ぶ
人ありて制し遂られ如勢
ある丸み止るをはゞして法律を建立しも
者ともゝんなる者ゝ昔楚の霊王國を失つ
て申支ゞ殺ふ入く縊りて死を申央奉霊王

ふ大悪有る故ふ已ゞ二人の女子を殺して霊王
の殉をさせて葬るもの右傳ふ出つ是尚葬ハ不仁
のるものと云へたゞ是をも殺をるの後をつくを
あり此等迄のの理をもつくそらで後をとりて
殺生の罪を奪なり。親の敵として人を殺をる。
孝をいふく殺生の罪を奪べきや先王の天地
宗廟をみるふ牛羊を用るも誠を盡て慈
申央ゞ芸地を推て祭るべき者ぞ。右のゆハ
或ハ賓客の舎宴或ハ羽毛皮角をみて一切
の器械ふ造るなるべ。并等皆老人の筏人を
使役さること同じの理ふして在との人の天

下士を以て之を治るの法制あり。周礼并に考工記等に審かなり。庶人の妄に畜殺をるゝの禁ハ非常の畜牲の類を用るも猶腥牛肉の九菜を用ると同一例ゐして書せざるべき事ハ肉きらびたる物と云べきを略ハ肉不飽と云べきを略ハ肉きらびたる物と云べきを略ハ肉きらびたる物と云べきを略ハ肉きらびたる物

勉強小過或ハ改悔死ニ至ルマデモ何ノ難モナク偶然トシテ於ルノミ也。春秋ノ時ハ古代ノ風ヲ存シテ聖人ノ御在世ヲ去ルコト未タ遠カラサレハ賢明ノ人多クシテ人ノ言動ヲ見テ能知ルヿナリ。然ルニ人ノ若カラサル悪ヲ顕ハスヿヲ好マス。実ニ面赤ラムヿヲ恐レテ我ニ非ヲ匿シ我ニ過ヲ改メサルヿヲ恥ル。此ヲ以テ丘明ノ如キ賢人ト雖モ左氏ノ書ヲ作テ三ツノ用ヲ為ルノミ。然ルニ孔子ノ如キ聖人ハ是非ヲ明ニシ善悪ヲ正シクシテ人ヲ導カンカ為ニ六経ヲ作リ給ヒ第一要務恥心ヲ以テ本トシ給ヒシ故ニ古ノ聖人賢人ノ名ヲ挙ケテ人ヲ警メ給フ。我カ輩モ人ナリ。恥ル心ナクンハ禽獣ニ異ナラス。況ヤ聖賢君子ト呼テ云ノ用ヲ為ルノミ。然ルニ孔子ノ如キ聖人ハ是非ヲ明ニシ善悪ヲ正シクシテ人ヲ導カンカ為ニ六経ヲ作リ給ヒ第一要務恥心ヲ以テ本トシ給ヒシ故ニ古ノ聖人賢人ノ名ヲ挙ケテ人ヲ警メ給フ。我カ輩モ人ナリ。恥ル心ナクンハ禽獣ニ異ナラス。況ヤ聖賢君子ト呼テ

キテ。高代ノ師表ト仰ラレ。吾ヲ人ヨリ見ル一身石ヲ負ヒ物ヲ荷フ。実ニ卒生ノ不行不作ヲ考ヘヘツトシテ人ヲ對シテ云ヘキヿヲ云ヘカラス。空ヲ仰テ面赤ラサルヿナシ。左ヲ見右ヲ顧ルモ知ル人ナキヿヲ。孔子ノ如キ聖神ハ又ソレ如何ソヤ。孟子ノ曰恥之於人大矣以其得之則聖賢失之則禽獣耳此意ハ恥ノ一字ヲ以テ人ノ身ノ上ニ係ルヿヲ示シ給ヒシナルヘシ。何ソ恥ヲ知サルヘケンヤ。聖人モ賢人モ恥ヲ知ヲ以テ

を云ふべし畜生ゟ云ふべし孟子の一語ハ過を改むる人の言和の捷ゟ云ふべし捷とハ
のくろ〳〵のつなろくろ
めつゟ過を改んともとる人ゟ云ふべし語を言和ふゟ
めて先ツ恥の一字を
第二要緊良心とハ
うそいきこゝろくをそろ
用ん事途と
下ハ北ゟ首ゟ
ふ行住坐卧ゟ
てもふ居ふゟ

ゟ者ゟ此段を
恥の一字を失ひ
ゟぬやうなる陰悪
今日利欲の為名聞の為ふ謀計を運し詐を
かゝんて人を欺んとも
りの多くハ人ゟ知ゟもの
ゟと言隠ものゟ
肝と有く胸中を裁割くんらふ如くんある者
ゟれで。ゟふと言くゟめ言かゞゟても不値一
文とゟ。此意ハ鄙諺ふ一文ゟなゟぬと云と
同一辞ゟ。又論語ふ朝聞道夕死可矣と云

へう。此意ハ一生悪を造りし人の終臨て悔改て。一生の枉を矯直して死ときる共可ありと云ふ。志專一ならんべき也。千人の閨室ハ一度改めて善とするやうに譬べたとひ吾行の殺を冥くも。老ての後同なるべき者ありや。哀むべきこゝろ。過ちを改ることハ老ハ恥らざる一事にても改むべき也。況や他人の身も長くみちびくをや。又仏門の教の慈悲をや。況や儒門の教ハ不忍の善ハ不忍の善ハ不忍の善

へう。此意ハ一生悪を造りし人の終臨て悔改て。一生の担を矯直して死ときハ必ず善所に生るといふ志專一なれバ悪を改めて善とするハ譬ベ千々の闇室ハ一度火をとぼせバ忽千年の闇を滅するが如くそう。人たとひ吾行の教を写さゞるも。老ての学問なうるごとくんの稽うめる者ハり。哀むべきこそう。過を改ることハ法らざる日とても改むをハ善を務をる孫ハ佛く。其身も長くみちうるこゝと云ふ倫俗の教の経そう。又仏門の教ハて云べき老ハ不定そう若一旦不意ハ黄泉

ハ統うへ一生ハしもめくべきの子に者そう。豈油斷ハ第三要發勇心とへ過を改むるハ善なるを起ることを云也。人くの過を改むるハ惟弱神ハんを奪ハるゝ故そう。若行の善の中に衣を脱て海川ハ飛入ゞ如くゞ毒蛇ハ指を噛たる者の其指を切て捨るゞ如くの念を起さゝ一天台の釋も捨身決定せべ行の罪ハ不滅と云へる。従来悪ハを為せ我身へ吹日死るゞ如く。過を改なる共身ハ今日生れ〳〵るゞ如〳〵と観念して。真實心ハ大勇

を仏とぶ。此を以易の風雷益の教ふる。右此三件の教を務め約よ時々其の氷の日々過ぐ如く改ふ事有て事のよふ於く改ふ。程を以改ふ。ことを以改ふ。ことに三重の一ふ事のよふ於く改ふ。ことに八。其日々教生せず。者の今日改めて教生せざるぐ如き。是を事のよふ於て改ふ。ことに。第二ふ理を以改ふ。ことに八。其日々教生を以戒ふ。て其理を云ぐ。天地へ好生悪殺ふ。

然ふ天地のきふひ。教生をして。天地ふ敵對をぐき理あ〳〵んや。又一切の生類至微の小虫と雖も。命を惜む。其を殺して。己が口腹を養ふ。道理の腑も一飽ふ止ふ。何て彼ふ生命を害して。我ふ生来おふの福を損ふの理あんや。又人ふ法ふ皆一体ふ生ずくの他を結ふ。機ふ思癌のふり。て又怒ふ。を成ふのふ。て怒ふ。福ふ因て怒ふ。是非の論ふ及ぐ甚ふ多

我ハ狂ヨリテ彼ハ妄狂ナル故ヲ知ラズ而ルヲ人ノ狂ヲ笑ヒ人ノ妄ヲ誹ル者ハ是レ人ヲシテ利トスル所ヲ失ハシメ人ヲシテ不便ナラシムルヲ思ハザルモノナリ況ンヤ人ノ兒童ト角力ヲ爲シテ之ニ負ケ之ヲ笑フニ於テヲヤ彼ノ之ヲ笑フガ如クンバ天下無自是之豪傑亦無无人之學問トナルヘシ。

此ニ於テ乎人ハ皆ナ偏屈ナル者故ニ能ク人ノ吸フヘキヲ吸ヒ吐クヘキヲ吐キ而シテモ改メズ人ノ吸フヘキヲ吸ヒ吐クヘキヲ吐キテモ改メズ人ノ吸フヘキヲ吸ヒ吐クヘキヲ吐キテモ改メザル者ハ必モ故ニ爭怒ヲ生ズルヲ以テ我ノ固シテ爭怒ヲ生ズルヲ以テ人ノ吸フヘキヲ吸ヒ吐クヘキヲ吐キテモ改メザル者ハ必モ故ニ

怨ろんをもて人をぴ学ひ向ろくるくとうまう然
ぢこゞ縦ぢるる人ふ学ひ向ろくるくとうまう人ふ対して是非を争ひ。貝を嗔一瞋をも
攘て怒るる人必有るまじ乃至非ぞや畢竟非ぶ手からくハ我徳の為故ことゞ
べーゞ遇べ処もの嫌傍ふ遇べ処もの喜くゞ思ふ匹夫
我等幸ろう凡庸の者うんを豈過失なろう
んや。嫌傍せろくハ直ふ異ふ教誡ろう徴て
拠受ことゞきゞ道理なろう。何て及て怒ろくべきことゞ
有ろんやぴくの如く
逸言謗語猶犬の如く

ろうんー。嘗てんふ
の過悪有ろ九ぴ此等ふ准じて道理を以ろもろ
どろんふ過ちふ自然ふ
第三 猛心而改ろふぴ上来のろのゞふ於く改め。
理をもろて改ろ等ふ
きゞ理ふ
一切の悪行を告んろう發ろうぴ。我此一人の原
を断ろうでろ時ぴ
らんや故ふ此一條を
ろなろうぴろんで毒樹
枝くふく一くふ勤ろふぴ及ゞゞして枯ろう如く

うう又夜ひく日天より出ゝ時ゝ諸乃悪鬼
邪神こぐく伏隠うう如くなう。日く悪くん
發ともまゝよ。發ともまゝよ。但一ふ善事
若ゝと志し。此会相續して間斷なりをで邪
会ゝ改ゝと待どし。て自然ゝ止むべきなう但一
是ゝ言ゝ根のくの修行の約へかう示の真傳ゝ若し
此真伝ふ堪ざるくの事のよう於く改もべし
さて若し此ゝ伝修行の人ゝ自力のこゝろへ
罪を滅し難しと知りてぞくへ雑き味ふ改へ
能き交ふ交ゝ。遠くハ仏天ゝ撃ち死ゝと記し一心
丹精を猛励して至極ふ急ぐべ識悔ゝ志を

へし或ゝ一七日二七日或ゝ一月二月ふるこゝろ
ハゞ此ゝ当身ふ於くく霊験ゝ顕るゝあう。甚霊
験の一二ゝ言ふく。或ゝ心神悟暗ゝそくりう何
の滞る事なくびろくゝなう又世間ふ貪求ゝ
不存ゝ忘れべん中ふも動ずゝるゝきゝ
なう。或ゝ智恵ゝ明ふ冥くゝて若ゝ世間の道
理。若ハ如ゝ書籍乃義理なゞ。従ゝ
前ゝ富ふ居ゝる者の急ゝ四方のゝ舗ゝと冥き
ゝる如くゞゝるゝとなう。或ゝ處ゝ皆一而觸
念皆通ゝいたゝくべゝ世事繁ゝの場ゝふ有て邪
業ふ行ゝゝらぞして刺ゝ彭ゝるふ悉甚ゝふ今ゝ之

あるいは遇冤讐而毗嘖作毒とか我ふくれ
怕有て他をころす者有
て思いなくして和藹をうしなう或ら
吐血をなやむ或ら神人異人の教を受る者
をり或ら虚空をとぶ仏堂神殿の荘厳の道具を
なり是皆罪障過悪乃清滅せ一数強なる者ん。
此の如く数をはらしくともの故なり。深くの故ハ窮
滴自得の意を起さゞるなり。然ば自
進むべし。昔唐士の衛と云國ふ遠伯玉とくる

賢人あり。孔子もわれ
けん二十歳の時十九歳までの過を改めたる
給ふ此一事ふかくうたがふべし。年
思ふに非なりと知ながら年の改やすと
そ又去年の非を改めざる是を改めざる
の非を改むるの如く年くみ改めべ十歳
ふるく非四十九年の非を知ると云ども
遠伯玉の如き賢人なり。
改めざれ者くらし。況や吾ごとの
凡流の者ハ過ち日くに積て年の如
くれ是も非もとらざるべし。但ちごとき

のこに非をとがめるに口まで言てうらくしおゝ暮をハ儀もうれるべしされバ太の如くに方うの敬有るといへ人の過悪深重うの者へ或ハ神昏塞轉頭即忘こゝろ次第ふ老耄もうろくするゆへ玄右ふ也んと思ひてもうろくするゆへなれ無事而常煩悩とへ行ゆきこゝ或ハ悪けこゝろするを悪こゝろ或ハ及ぬるを強て執ひ為ゝ或ハ空結ふなゝねことを空結ふして心神を悩乱をとゝなうゝ或ハ見君子而報然消阻とへ道の正しれ人ふ出會てハ自然とそらそぶうしくゝ平生の務ぬまて早く去んとするを欲をとゝなうゝ或ハ聞正論而不樂とへ虜大利の者をうしく正しく物語うるをすることなれべ他見をして罵くへ耳ひさそるものゝこゝなれべ他見をして若しゝとなうゝ或ハ施恵人而反怨しへなもく人ふ慈恵のこゝなどで施せべ及て恩そと怨みゝく報もとるゆうれせうとゝなうゝ或ハ夜夢顛倒甚妄言失志とへ等なをとゝ及てゝ或ハ左くの虚妄

そこそこくも我が身後よの方ふびんそうに人ト
も妄りに語り耳せ志もその狂しくなりそも也
是皆積悪の験なる者なろうそくたのうのこそ
んよ思へ知りなくんこそ根のくの過ちを
改むべし。猶像とそうるのみうれ
訟云ふ第三條そくし根の人の過そうる系みて
幸侍家ふ於く別ふ藏悔乃俊法有う。在家下根
の人の修行ーいうるのふ非ざでそれ先生一家代書
を著して天下の人ふ告を働んとそうるに上中
下三根の人を洗をべきふ非ざ要き藏法の別
深ふ也づて大概をかうもうるなるべし初んよ人

ふ一條の及び雑きそとうそく全篇の主意を於う
うのみを旦今又是ふ加へて初んの人の為。此
一条ふ准んじて一つの男行をえらぐだの如く
拵くれ悪念起る時ぷーも強く制止せざ甚会
乃當下をそくそうさて彼のよふ出を秘文をと
唱ふぐーー是元ふのよふ思ふるりのこ爰ーくふ
ふ悪べきよのふ陥るりのこそ
さて又ふ改過の篇の初めふ人の威儀言動を
えて古過をかうるのぷ左傳國語をこそ良しこうう。
論也未ぐうんぼうふ人ら甚んわれなくべし。今

二年の内に相ついで累りてしりぞく○冬減孫達
諫極公厲の内史寧て減孫達が魯国ふ在て子
孫長久ならんことを乞ふ○秋達魯国ふ使ふ對ふの絳を滅
瑕擧足高鬪伯比見て厲ふ放軍して絳を
絳をとく乱せんことを○宋乃公子御說と云人魯国ふ
孫達寧て御說が宋の君となるべきことを
かたりて知らする○閏の王子頽宴樂失時鄭伯
寧て王子頽う佐をとらしむることを好ざる
る○鄭厲公六代の樂を備原伯寧て其年の
又月厲公卒をとらする○邾子

と魯公と執玉高下あらざる貢見て二君共ふ死亡
しかごごろしるをとらざる知る○邾の子蘧
執擊傲叔仲惠伯目見とく宣が四年越椒が一族盡く滅
されしるをとらざる○宋公と叙孫と宴し
て相哭をとらざる知る○此年の冬二人共ふ死せるを
うて知る○鄭伯捘王過両捘間士貞伯をとく。
鄭伯のとくしてしりぞくべしてしりぞくをとらざる
○成肅公受服不敬なる。劉子こえて成肅公う瑕と
云ひして死せんる○周の景王
無射を鑄る泠州鳩景王のん疾をとれ崩ぜんる
をとう知らざる知る○齊の高厚太子光をとう相とく諸

候ふ會と不敢なり。士莊子云く後二人ともに
歌ふれば一つをとり終る。〇魯の叔輒日食ふ
哭と駈子再て甚年八月叔輒死す。〇うそ終
て終る。〇鄭屢宋を侵して競孟獻子再く勁
政の三方夫盜小歌ふれしをとり終る。〇衛
の石共子死と其子悼子哀ともに孔成子再く悼
子ぐ出奔せしをとり終る。〇齊侯と衛侯
と會と二侯俱ふ不敢のつ皆う叔向見て齊侯
ハ襄が廿又年衛侯そ北二年同く獄せらるをつ
そとり〇て終る。〇晉の程鄭公孫揮ふ會して降
階を問然明再て翌年程鄭ぐ死せるをとり〇て終

る。〇晉の輔宣子聘周辞を失せぐ。天子再て宣
子ぐ子孫の栄へんうそとり終りぬ。〇鄭乃
子展侯有ぐ子西子産子大叔仰段公孫段以上七人
詩経の中の詩をゐひくふ小唱。晉の趙孟再て一
一ふ其人くの体答をとく。論定せり。已上二十條
ハ有ぼ一なり。盡く知るべきをとるの八煩ハしくられバ畧を

決科要語

楊貞復先主撰

体寧と云処ふ洪甲先生と云人ぞる。其門人ふ程学
聖と云人ぞる。聰明ふして操正直
なる人ぞる。中年以後ふ身ハ人間ふ有ぞるべき神
を冥中ふて往来せしめたる人ぞる。遂ふ冥中ふて雷

部郡友とそ雷方の役人となれっぷ雷ふ人
ふる故ふ人の吉凶生死をとふ微塵もたがふ事
なのに雷雨のふ光ふ雷の為べきをおくふて方
ふ師近浩甲先生へ告げ知らせたらぷ始ふ化人
へ雷て知ふ者なり。但洪甲のこと知ふ事ふ成ふ洪甲我
身の一生涯のふそこ同じふそれを学ふ聖曰く先生今世
へ殺ふ為ー但ー真中に於て甚ふ先生を重ん
ぢふ也因ふ先生をこれ陶君の師とせんふをおそふ
と云へり。洪甲聞て一笑して曰くとても今世の身分
ハ貧残なり。今ふも冥中に徃ふく陶君の師となふ
ハ亦快活のふに非ふやとそへり。然ふれ其日の暮

方ふなんて洪甲俄ふ打倒きて正気を失へりぷそのふ
ふ家門の人庭上をとうとくわりして友人のをう
者ふふへ人ふをとふくて居ふふ暫くありてふ退た
をまふ洪甲も程なく蘇ふ学聖ふく洪甲に云やうへ先生昨晩ハ行ふふ
りしや唔爰元ふいふふるの宵んぷ晩先生ふの陶君
の師とふるふハ快活のふなりとの言ハ冥中に真へ
なる故ふ列使者をふて先生を迎へふ為ふ甚れ
共拙ふ先生の厳ふいふふるのを知る甚へ上命
ふ当をきそとやのべくお止めふ致したりとそまふ
小冷笑して止ふりき。

さて寓中のる学生ども洪甲に告げ知らしめる。洪甲うべなひてくふ洋てど仕潘雪松と祝石林と二人ふたりを訪ひて詩して語るるのみなり。然らば此二人洪甲と交るる人ふたりなれど学問徳行共に勝るや及等のこと有おそう。たる人なれば何ぞ洪甲学ぶに足らざるを宜ひ乞ひ学べ。学ぶべきを回くば一事ハ我まづ識分ふ雪松ハ萬暦十一年癸未の榜小姓名ふたり。石林云ふまでもなく洪甲に先立て及第せり。洪甲又石林が及第の時を求考るるも雑まぐれ仕ひ先立ちと云ひさだ。二日過ぐて来て洪甲に告て回く。

泥ざれハ知らざるを但し一事ハ我まづ識分ふ雪松ハ萬暦十一年癸未の榜小姓名ふたり。石林云ふまでもなく洪甲に先立て及第せり。洪甲又石林が及第の時を求考るるも雑まぐれ仕ひ先立ちと云ひさだ。其年の正月小定まりなり。旦榜の定るを待ちもて其年なるべきでもと知りてん中に畜又其年ふたり三年過て万暦十三年乙酉十月小ふたて又学生聖小同学聖對て回く適二ツの天榜うれうべへるるハ萬暦十四丙戌の榜うべ下なるハ同十七年己丑の榜なりぱ己丑の榜小石林公の姓名あり。然も其外ふたり下の二榜の姓名其外ふるふうれバ或ハ上ぐ下となり下ぐ上となり。

又姓名の救多くなるうちうとつくう洪甲甚敬を怒ふ学ま聖同く冥中のる陥なるれべ陥鉄ほなうそとべて冥へ中に於く人間の罪福を處分ととるらと。

其微細るるる許部う月旦評のおきるまとも非とそ。平生善事をとも生ぞれで神乃其織をふくむそ卒生不善をも為人くても。不圖一会悉ん為人くても。痛悔改むもバ神又其罄香を觀喜と形と彩と声と響とのおくなる者なうそて亦先生もほなのをう天ふ文章を司どる星ふ文昌星と云ありぬ等の一事ハ專此

の文昌星の府ふ属さるなう敬ふ文人立身乃るの皆此府の牲而ふ載なうそくく此文昌府中ふなくく人間文人の罪福を處置とる格式を見るふ其幸人のんの微善微悪へやれ及べぞ。高祖父曾祖父祖父父微善微悪までも其幸人出世のはふ計校差ふありるるなう此ふ依く祖先の徳の積まるハ其人不善なれ先出世とるるのありぬ又祖先不徳なれで善人ふれ先落等とるるありぬ其人身持を換東元ふれ其人中に於く固く正直をちう。悪毒の意るれのとろう挙らるくなうぬ其人身持

を怪むやうなれども。八人中小諸より来らるゝ人ゝ来
るゝなるべし已に天榜ふ名を載らるゝ人の名
を削らるゝの有ハ。八人中新ふ恩命を生ずる
が故なるべし其人本名の載もうで往不若人うても。
忽載らるゝハ八人中若命ふ改もうが故なり。冥中の
成敗ハ甚人の身おんうちふ因て忽去となり忽
也と称して平生斟酌も薬を亜てのハなし。今天
榜二処ふかゝうて二榜の姓名と下榜減不定也。
此ふ因ゝ石林子の榜ハ已丑の年なれ共及第立
身のるハ甚ふおゝぢもハゞ今ようハ針実ごと
くなるとこゝう然るふ石林幸不若人ふ非ざる
ふ似るのを写てよく怪めるが故なり。果して已丑乃
年及第せり而も此年の判者ハ楊貞復先生のうや
なり。雪松子と同ふなり。○私ふ曰判者と云姶
馮用之として有りしが
元例の処ふ入る如く。謝
ゐう。前着の衣を吏部郎と云なう。さて予百
石林の方へ訪いなるふ。石林
承なるなう予此絵を写て大いふ感歎し
已ひ合とるの有う。予幼少の時ようふ従ゝ
の学問せり。ゐ倣ふ釈の
て若文字章句のるふ

なぐの有をバ甚なくびごとふ父ふ望そして喜バ
めをれり錢をた但憾るゐを予ゞ母人甚多の痛
ふ契へくゝ此ふ因て毎ゑ人の森をぐまるとゐ
て大路へ出て天道ふ向くゝ行摯てとうけたゝ甚へ色
ゝ我をふみゐとそ早くゝ及第之身ー父母とゐて
息実延令ふて長く家門の繁昌をとゞせーめた
まへとにる唱へんる。爲ーて行捗ぜうぺ時言ふ
へ至ゑ但又母のるのゝ児ふく化事ハ当りゝ。
を郷学ゝて、ハ二十一歳の時己ふ撰人の数ふ入まる。
其後都の試場ゝてハ度くゝ出ゝれ共甚度ごと
ふ落第ゝて空ーくてのゝ家ふ還まうゐふ還

るおとふ父母のん中をとゝ祭やう骨をひーぐ往
ふ悲ーかうた望ふ於くゝ又大雰猛のんを記ー
仏おふ向くゝ朝夕黙禱ゝて永劫をゝ遂る事能ハざ。今ようゞそハと
ひ大友孫をけるた志を道徳ふ潜毛頭も富
貴ふ泥べくゝ官政ふ在くゝ民を安ぢるを
事ゝてがうそめふる。菓ゞ身ふの私をなぞ
をうゝべさくゝ總ゝてハ上ゐ我ゞ君ふ忠をと曲ー。
下へ我ゞ父母ふ孝んをと往をとべー。ぺん若敷るゆあ
らべ神明忽ち罰ーゐくゝ誓をけうぺ拵てをと立
てゝ二年過くゝ及第ーま吏部郎の官ふまて升

まるなう学を専の冥中のるを知語せ〜っく
をんく楽どるふん中の吾恵ふ困くよ天への冥衛
冥罰おるるの八予ゞ往来の仕業ふ思ふくぶれを
後ふ然うべきつえ大抵今の世ふ在くも。及第立身
志くく名誉と天下に伝するんもまざをめてう乃
仕合と思よべうんび皆幼おのはようん中に大我を
立るなう然も充天ん捜らを漏さるを忘む故ふ妄
てふんう八後らぎるく。予ゞ今の身ふ及びも。右
の如く私んと立くくんゞ身の行ひを勢なる故か
らんと思よでかりなう。況くやも天機を漏さる
も先。良ふ一つの止むるのをねぢるの志有うそれ

乎八五穀の干場ふ穀粒めをへ。其友と呼ひ集
ち原野のてふ其類を集。乎類毒類行尓なく。
今ま天下の士人ら皆我ゞ同類うう。此の如き神道
を宣ていうでう我ゞ同類ふ伴くぢるのをねんや是を
いて聖君の西後の教きぞ。其ふ予ゞ立身せ〜始末を
のべて及第立身を徳行を先とべきるを論
ふ年子ふ告知〜む者うく〜。
私ふ曰此決科要語の作者楊貞復先生を此
緑来の年号。其ふ潘雪松を馮開之ゞ時ふ立
身せ〜教きて考。乃先生とふ困時
代の人うり。困くて此緑の歩る

を幸として此書の門へ加くられたるもや久
此奇書を写及びて子元先生の方より借う
けて加へらるるなるべし。

東武北泉戴岳画

陰陽文繪鈔

全部二冊

陰陽を施して天の陽報と悪さるれの積悪乃
冥罰とうけ報ひ。和漢の奴婢と奢れし珍と
して児女の玩弄ふ徒へ。如のつくり伝法
作者ふ奉〳〵如〳〵と書なり

この仁人のさ〳〵ひめくるや亜伝の自如
孫ゑう墓あらかゝそのうゑ必りとめて
此ことゝめさせるべし〳〵
和字功過自紀録と〳〵全部一冊也

文政元年寅十一月再板

京都　堀川通高辻上ル　植村藤右衛門
江戸　日本橋通南壹丁目　須原茂兵衛
浪華　両國通吉川町　山田佐助
高麗橋壹丁目　赤松九兵衛
北久太良町四丁目　岡田新治郎
心齋橋安堂寺町　中太右衛門